

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2023
graph magazine vol. **62**

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3・3)

vol. **62** 定価100円(税込み)



SH-5_mm Bg01



Unser
HERR
lebt
主は生きておられる

主は生きておられる
Unser HERR lebt

メッセージ

- 4 イエスの救い(11) どうしたら主のしもべとなれるのか
ゴットホルド・ベック

- 22 神のわざが現われるためです 黒田 禮吉

6人の証し

- 32 夫の病気を通して主を知った喜び 関根 恵美子
- 39 たとえこんな私でも主は愛して下さっている 上田 正
- 46 大切なことは、感謝して死ぬること 一瀬 かほる
- 55 主は私を捕えてくださった 鈴木 快典
- 63 すべてを導いてくださる主イエス様 鈴木 環
- 73 主の導きはいつも益だった 鍋島 聖一

メッセージ

- 81 キリスト者の戦い 重田 定義

イエスの救い(11)どうしたら主のしもべとなれるのか

ゴットホルド・ベック

どうしたら私たちは真の神のしもべとなることができるのでしょうか。今回は、このことをともに学んでいきたいと思います。

ドイツのある神学校に行くと、入り口に「仕えるために救われた」と書かれた額がかかっています。その神学校へ行くと、私は深い感銘を覚えます。額のことばだけではなく、そこに学んでいる一人ひとりが奉仕の精神に徹していて、イエス様のかたちが一人ひとりのうちに形造られているのがわかるからです。

パウロはテサロニケの信者たちに、彼らが偶像を捨てて「神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるように」(1テサロニケ1:9)なった、と書き送っています。

また御霊様は、私たちに対しても「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです」(2コリント5:15)とパウロを通して語っておられます。

どうしたら私たちは真の神のしもべとなることができるのでしょうか。真の奉仕の源は一体どこにあるのでしょうか。

真の奉仕の源―主に仕えるための法則

主イエス様に仕えたいと願うキリスト者が、どうし

ても従わなければならない法則があります。これを離れては真のご奉仕はあり得ません。主なる神様はみことばをもって、この法則を教えておられます。これは、救われるために知らなければならない法則と同じくらいに、ご奉仕をするために知らなくてはならない大切な法則です。

救いの条件は、イエス様の死とよみがえりにあります。私たちはこのことを幼子のような心をもって受け入れ、感謝することによって救われました。

私たちは一体どのようにしてキリスト者になったのでしょうか。聖書を読むことによってでしょうか。祈ることによってでしょうか。あるいは集会に出席し、良い人になろうと努力することによってでしょうか。いいえ。そうではなく、主イエス様が私たちの罪、咎のために死に、よみがえられたことを知り、それを心の目で見て、主イエス様に感謝した時、救いの確信をいただいたのです。この救いの法則を、ほんの少し違えても救いはありません。主イエス様の死とよみがえりを

信じて救われるというのが救いの法則です。

では、ご奉仕の法則、主イエス様に仕えるために知らなければならない法則とは一体どのようなものなのでしょうか。

次の三つの点を取り上げて考えてみたいと思います。第一番目はご奉仕の法則とは何か、そして第二番目は、ご奉仕の力について、第三番目はご奉仕の目的についてです。

1. ご奉仕の法則

第一に、ご奉仕の法則は何でしょうか。それは主イエス様の死とよみがえりを自分のものとして受けとめ、体験することです。この法則を自分のものとしていない限り、あらゆるご奉仕は価値がなく、「永遠の実」が結べないご奉仕となってしまうのです。

それでは、死とよみがえりを通り、体験するとは、一体何を意味するのでしょうか。罪を犯した魂は必ず死

イエスの救い(11)どうしたら主のしもべとなれるのか

なければならぬ、とみことばには書かれています。この死と滅びに定められている私たちを救うために、主イエス様は死なれました。主イエス様は私たちの身代わりになって、血潮を流して下さいました。ですから、たとえ人々が何と言おうと、私たちの心に疑いが起こっても、サタンが訴えてきても、主イエス様の血潮は父なる神の御心をなだめ、満足させたので、私たちは主にあつて喜ぶことができます。

しかし、主イエス様の死とよみがえりは、さらに勝った意味を持っています。主イエス様は私たちの罪のためだけではなく、私たちの「罪の性質」のためにも亡くなって下さいました。私たちの古い人はイエス様とともに十字架につけられてしまいました。この恵みと信仰を通して、もはや私たちは罪に対しては死んだ者、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者であると思い、主である神に喜ばれるために仕えてきました。

ところが、そうしているうちにローマ人への手紙7

験しなければなりません。

旧約時代に、もうすでに死とよみがえりを体験した神のしもべたちがいました。

聖書はモーセについて次のことを伝えています。「モーセは主に申し上げた。『ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。』」(出エジプト4・10)とモーセは告白せざるを得ませんでした。彼は本当に自分の無力さを体験的に知るようになったのです。

またイザヤは次のように告白しました。「そこで、私は言った。『ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。』」：「すると(主は)仰せられた。『行って、この民に言え。…』」(イザヤ6・5、9)

そして、士師記には「ギデオンは言った。『ああ、主よ。

イエスの救い(11)どうしたら主のしもべとなれるのか

章の戦いがやってきました。聖い者でありたい、主に仕えたい、主に捧げたいと、一人ひとり心から願います。しかしその努力も虚しく「ああ、私は悩める者です」と叫ばざるを得ない自分の実態に気づく時がきます。私たちは神に仕えることができないばかりか、自ら聖い生活を送ることすらできません。私たちは自らの力で主に仕えることは決してできません。ローマ人への手紙7章はそれを教えています。

これを知るためには、大きな悩み、苦しみを通らされる必要があります。真の神のしもべとなるためには、それがどうしても必要です。

ご奉仕をするために一番大切な準備は何でしょうか。聖霊を注がれ、聖霊に満たされることです。ところで、聖霊はいつおいでになったのでしょうか。主イエス様が死んでよみがえり、父なる神の右に座してから聖霊が下りました。聖霊はかつて一度、全教会のために降り注がれました。しかし、私たちがこれを個人的に受けるには、主イエス様の死とよみがえりを個人的に体

私にどのようにしてイスラエルを救うことができましよう。ご存じのように、私の分団はマナセのうちで最も弱く、私は父の家で一番若いのです。』」(士師6・15)というギデオンの告白があります。その後の34節に、「主の霊がギデオンをおおた」と書いてあります。原語を見ると「聖霊が、主の霊が、ギデオンを着た」となっています。これは私たちも服を着ていれば外側の服が表に見えますが、着ているのは私たち自身です。それと同じように、主の霊がギデオンを着たのでギデオンは着物のように外側になり、聖霊がギデオンの中に宿ったのです。さらにエレミヤのことは次のように記されています。

そこで、私は言った。「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」すると、主は私に仰せられた。「まだ若い、と言ふな。わたしがあなたを遣わすどんな所へでも行き、わたしがあなたに命じるすべての事を語れ。

(エレミヤ 1・6、7)

またアモスはアマツヤにイスラエルで預言すること
を阻止されユダの地に追ひ返されそうになったとき、
次のように語りました。

アモスはアマツヤに答えて言った。『私は預言者ではな
かった。預言者の仲間でもなかった。私は牧者であり、
いちじく桑の木を栽培していた。ところが、主は群れを
追っていた私をとり、主は私に仰せられた。『行つて、わ
たしの民イスラエルに預言せよ。』と。

(アモス 7・14、15)

これら旧約時代の神のしもべたちは、神のご奉仕は
自らの力のできるものではないこと、主なる神ご自身
の力なくしてできないことを悟らされていたのです。
愛する兄弟姉妹よ。本当に覚えていただきたいのは、
ご奉仕は、神自らでなさりたいと願っておられるとい
うことです。私たちの生まれながらの才能、賜物は、死
とよみがえりを通らなければ、決して神のために役に

立ちません。生まれながらの賜物、教育、教養、これら
のものをもってご奉仕しても、もし死とよみがえりを
通っていないければ、永遠に実の残るご奉仕はできない
のです。

モーセはかつて、立派な教育を受け、多くの能力を
持っていました。熱心であり、また勇気があり、すばら
しい知識も持っていたのです。イザヤもエレミヤも、
よい教育を受け、社会的な地位と名声を持っていたと
思われます。新約時代になって、パウロは最高の学問を
身に付けた人でした。これに対してアモスやギデオン
は、あまり教育を受けていない平民でした。またイエ
ス様の弟子たちは、普通の教育を受けただけの貧しい
人々で社会的地位もそれほど高くはありませんでした。
無学な「ただ人」だったのです。しかし主に仕えた
これらの人々は、一人残らず同じ体験を持っていたの
です。すなわち死とよみがえりを体験していたのです。

主である神は、人間やその人の生まれつきの力を用
いようとは思っておられません。神様は、まず働き手

を霊的な破産に導きます。神様ご自身が、その人を通
して働くことを願っておられるのです。

主イエス様がその模範を示して下さいました。イエ
ス様の公のご奉仕は、いつ始まったのでしょうか。洗
礼の後でした。洗礼は、死とよみがえりを教えていま
す。イエス様が洗礼をお受けになると、天から聖霊が
鳩のように下り、イエス様は聖霊の力に満たされ、そ
れから真のご奉仕が始まったのです。

私たちはどのようにして主に仕えようとしているの
でしょうか。

イエス様は弟子達に、上から力を授けられるまで、
つまりよみがえりの力が自分のものになるまで、あな
たがたは都にとどまっていなさいと言われました。

そして、「しかし聖霊があなたの上に臨まれるとき、
あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤと
サマリヤの全土、および地の果てにまで、私の証人となり
ます」(使徒1・8)とイエス様は言われました。ただ聖

霊によつてのみ、真の神の助け人、仕え人、しもべとな
ることができなのです。

聖霊はいつ私たちを用いられるのでしょうか。私た
ちが死とよみがえりを体験した後に、御霊様は私たち
を用いることがおできになるのです。

ご奉仕の第一番目の法則は、イエス様の死とよみが
えりを自分のものとして受けとめ、体験することです。
この法則を自分のものとしていない限り、あらゆるご
奉仕は価値がなく、「永遠の実」を結ばないご奉仕と
なってしまうのです。

2. ご奉仕の力

次にご奉仕の第二番目の法則、ご奉仕の力について
ごいっしょに考えてみたいと思います。

私たちは自分の力で主イエス様に仕え、真のご奉仕
ができるかどうか考えてみましょう。私たちは、自分
で主のために何かすることができのでしょうか。

イエスの救い(11) どうしたら主のしもべとなれるのか

生まれながらのものをもって主に仕える時、主がこれを用いたかどうか、この問題に答えを出しておくことが大切です。もちろん、私たちの生まれながらの悪い性質は神のご奉仕には役立ちませんが、私たちの良い意思はご奉仕に役立つのでしょうか、役立たないのでしょうか。私たちの良い理性、良い信念、これらは奉仕に役立つのでしょうか。

例えば、歴史や科学に非常に秀でた人が回心し、キリスト者になったとします。するとその人の目指す目的が変わります。しかしその人は、前に歴史や科学を学んだのと同じ力で、聖書の「エペソ人への手紙」や「コリント人への手紙」から学ぼうとします。

あるいは、放送局のアナウンサーが信者となったとします。すると人々はすぐにこの人を説教者にしようと思います。しかし主を信じたアナウンサーにとって目指す目的は変わりましたが、彼が働く力はもとの生まれながらの古い力です。

すべて主である神に仕える者はみな、モーセ、イザ

ヤ、エレミヤ、ギデオンのように、生まれながらの古い性質は神の働きのために何の役にも立たないということを知らなければならないのです。イザヤは主に向かって、「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で」と叫びました。「主よ、私は汚れた者です」と言うとき、この汚れとは何でしょうか。汚れとは、自らの力と聖霊の力が混じりあっている状態です。聖さとは何でしょうか。聖さとは、完全に聖霊の支配の下に入ることです。

「私は汚れた者です。主よ、私から離れて下さい」と、言わずにはおられないのが私たちの状態ではないでしょうか。私たちはイザヤのように「私は、もうだめだ」と自分の状態をみて叫んだことがあるのでしょうか。そこまで進んでいるのでしょうか。

主イエス様ご自身、「わたしは、自分からは何事も行うことができません」、「子は父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません」(ヨハネ5:30、19)と、言われたのです。ご存じのよ

から。

(士師 7:2)

うに、主イエス様は罪のないお方であつたのにもかかわらず、自ら語り、自らなすことをしませんでした。罪のないイエス様でさえ、神のしもべとなるためには、主である神に完全に拠り頼まなければならなかったのです。

なおのこと私たちは自らの力ではどんな小さいご奉仕もできない、ということ悟らなければなりません。御霊様だけが、私たちのうちに働いてご奉仕をなさせ、目標を達成させるお方であることを知しましょう。自分の力で行うご奉仕は一時的なものであり、決して神のご目的を達成することができないのです。また神の御心を喜ばせることもできません。士師記7章2節に次のように書き記されています。

そのとき、主はギデオンに仰せられた。「あなたと一しよにいる民は多すぎるから、わたしはミデヤン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救った。』と言って、わたしに向かつて誇るといけない

また、コリント人への手紙第一の1章31節に「まさしく、『誇る者は主にあって誇れ。』と書かれているとおりになるためです。」とあります。

すべての栄え、すべての栄光が主に帰せられることが問題です。

救いの時に、主は私たちのためにすべてを成して下さいました。人の勲功は、何もそこに関わっていません。私たちは「贈り物」として永遠のいのちをいただきました。もし救われるために自分で何かをやるうとしたなら、それはすべて妨げとなったことでしょう。ご奉仕の場合もこれと全く同じです。

主はご自分の働きに、人の力を求めておられません。主は御霊によって人の心に住み、その力によって自ら働こうと思っておられるのです。そうすることにより、

イエスの救い(11) どうしたら主のしもべとなれるのか

すべての栄光をご自分に帰そうとなさっておられます。けれども、御霊様が私たちのうちに働いてなされるご奉仕は、私たちが「死」を通らなければできないのです。人々は頭のよい才能のある人を見て、もしその人がクリスチャンになったなら、どんなに素晴らしいご奉仕をするだろうかと考えますが、それは当てはまりません。また、あるクリスチャンがどれほど人あたりがよく、すばらしい判断力を持ち、頭が良いとしても、それが生まれながらのものであるなら、教会を益することができません。主イエス様はおっしゃいました。

肉によつて生まれた者は肉です。御霊によつて生まれた者は霊です。
(ヨハネ 3:6)

御霊様のご支配の下にない、生まれながらのものはすべて肉であり、人に栄光を帰するものです。

主である神のご奉仕で一番大切なのは、ご奉仕の力がどこから出てくるのか、その源が何であるかです。

二人がどこかの集会に招かれ、話すように言われたとします。Aさんは上手に話ができます。ですからもちろん祈りはしますが、Bさんほど熱心には祈らないでしょう。Bさんは自分が口下手であり、うまく話せないことをよく知っていますから「主よ、もしあなたが助けて下さらなければ、私は駄目です」と、Aさんよりもっと熱心に祈るでしょう。今度は逆に、二人とも実際の働きを頼まれたとします。するとどうでしょう。Bさんは自分の得意とするところですから、さほど主の前に訴えません。しかし今度はAさんは自分の無力を覚え、ひたすら祈るでしょう。

これらを考える時に、Aさん、Bさん二人とも主の御前に全くご奉仕をしていないことがよくわかります。ある時は自分の力でやり、ある時は主の力に頼り頼んでいます。生まれながらの能力、力は、「死」に渡されなければならぬのです。そしていかなる場合にも、主に全く頼り頼まなければなりません。ですから、イエス様は、前に引用したヨハネの福音書15章5節に「わ

イエスの救い(11) どうしたら主のしもべとなれるのか

私たちが何をするかはそんなに問題ではなく、何の力によつてご奉仕を為すかが問題です。私たちは何をするのか目標を考えますが、その目標を達成するための手段についてはあまり考えません。「目的は手段を選ばず」という諺ことわざがありますが、その通りにやってしまいます。

多くのクリスチャンが、主のためにご奉仕をします。が、自らの力でそれをするならば主に喜ばれません。次の主のことばはよく知られています。

わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。
(ヨハネ 15:5)

一つの例を考えてみましょう。ここに二人のクリスチャンがいます。Aさんは非常に上手に話をするのでできる兄弟ですが、いざ実際のな仕事をさせると何もできません。これに対しBさんは口下手ですが、実際のなことになる何でもできる兄弟です。

たしを離れては、あなたがたは何もすることができない」と言われたのです。

どうでしょうか。本当にそうでしょうか。見たところ、このみことばは間違いのようです。私たちは自分で聖書を読み、自分で祈り、自分たちで集会を開くことができるのではないのでしょうか。

このみことばの意味するところは、もし主イエス様なしに事を行うなら、その結果は何の価値もなく、実が残らないということです。主が私たちのうちに働いてなさったのではないご奉仕は、やがて木や藁わらのように焼けてなくなってしまうでしょう。主ご自身がそうおっしゃっているのです。それを真面目に受け取らなければなりません。

私たちは自分からは何もやらない、やろうと思えば自分で何かできるけれども、それは主を喜ばせることができないからやらない、そこまで私たちは主に頼り頼みたいものです。私たちは、いかにいろいろな賜物を持っているとしても、主に全く頼り頼みたいもので

す。主に役に立つ真のしもべになりたいものです。

主の御心になうご奉仕の力は、私たちのうちに住みたまう御霊様の力だけです。これを学ぶために、私たちは悩み、苦しみを通らなければなりません。

神のしもべであるモーセは、四十年の長い間、荒野で羊を飼っていました。働き盛りで力に満ちたモーセにすれば、まことに物足りない仕事だったに違いありません。モーセはエジプトから荒野に逃げる前に、イスラエルの民を救おうとしました。その目的は良かったのですが、その方法が間違っていました。モーセが荒野で学んだことは、自分の力は神のご奉仕のためには何の役にも立たない、ということだったのです。

イザヤも主にお会いした時、自らの無力さを深く悟りました。イザヤだけではなくエレミヤも、自分の弱さ、みじめさ、また無力さを悟った神のしもべでした。

パウロもダマスコの途上、主の光に目がくらんだ時、そして主のご支配に入った時、自分の学問や力、才能

は全く無力なものだと悟りました。

主に対する完全な抛り頼み、信仰、従順、へりくだり、忍耐、これらは本を読んだり説教を聞いたとしても自分のものにはなりません。これらはただ、苦しみ、悩みによつてのみ、自分のものになるのです。

私たちが知らなければならぬ第一番目のご奉仕の法則は、イエス様の死とよみがえりを自分のものとして受けとめ、体験することでした。第二番目に、主の御心になうご奉仕の力は、私たちのうちに住まれる御霊様の力だけです。決して生まれながらの能力、力ではありません。そして最後に第三番目として、ご奉仕の目的について考えてみましょう。

3. ご奉仕の目的

すべてのご奉仕の目的は、主イエス様でなければなりません。

詩篇の作者の一人であるアサフは、「地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。」と73篇に書き記したのです。「地には、あなたのほかに慕う者はない」と、真の神のしもべは言っています。

私たちは魂を救いに導くため、御国を建てるために働くだけではなく、第一に、主に喜ばれる生活をするということが目的でなければなりません。「主イエス様のために働く」ということと、「主イエス様のために生きる」ことの間では大きな隔^だりがあります。「イエス様の他に何も必要としない」、それが私たちの心の態度でなければなりません。

それに加えて、私たちは御霊様の力と、自分の力との間の区別をはっきりと知る必要があります。聖霊の力は神の力、天的な力、霊的な力であり、真の神のしもべはこの力に導かれていなければならないのです。これに対し、自分の力は人間的、世的、肉体的であり、多くのいわゆる「神のしもべ」がこの力に動かされてご奉仕しています。

多くの人々は、聖霊に導かれているかどうか、どうしたら区別ができるかと尋ねます。これらの人々は自らのうちを省^{かえり}み、自分を分析し、自分の虜^{とりこ}になつてしまっています。自らのうちを見つめる時、そこには、欺^{うそ}き、絶望、不安定、疑いしかありません。自分をどんなに調べても、自らを知ることができません。

しかし自分のことを試される方が必要です。主のためにご奉仕をしていると言いながら、実は多くの場合、主の妨げをしていることが多いからです。どうしたら私たちは自分を知ることができるのでしょうか。これには三つの答えがあります。第一番目は、神のことばです。第二番目は、他の信者のことばにより、光を与えられる場合です。第三番目は、光のうちを歩むことです。

私たちは第一に、神のみことばによつて自らを知ることができます。詩篇の作者は36篇9節に「いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。」と書き記したのです。私たちは主の光の中

イエスの救い(11) どうしたら主のしもべとなれるのか

を歩む時、自分自身を知り、さらに自らを知るに従って、よりよく主を知っていくことができるのです。

私たちが暗い部屋を掃除する時、大切なのは光です。光がない時に掃除しても、部屋の中を乱すだけです。自分の心のうちで何が善であり、何が悪であり、何が神の御心であり、何が自らの思いであるかを見分けようとするのは、ちょうど、真つ暗な部屋で黒猫を探すようなものです。結果は失望と落胆に終わるでしょう。顔が汚れているかどうかを知るためにはどうするでしょうか。手で顔をなでてみるでしょうか。そうではなく「鏡」を見ます。何度、顔をなでても、きれいかわからないので、疑いで不安になってきます。けれども「鏡」を見る時、すべてがはっきり見え私たちの不安は解消します。

ダビデは自分で自分を調べることをしないで、主に、自らを探っていたきました。彼は「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩い^{わづら}を知って下さい」(詩篇139・23)と祈ったのです。主に探ってい

ができます。

(ヘブル 4・12)

みことばはすべてのことを明るみに出します。どうしたら、私たちは自分を知ることができるのでしょうか。第一にみことばによつてです。

また、二番目に他の信者のことにより、光を与えられる場合もあります。私たちはいろいろな人に接しますが、この人のそばにはイエス様が近くおられる、と感じさせる人もいます。このような人々と交わる時、新しい知識が与えられます。そのとき疑いと失望は去り、喜びと自由を持つて主に仕えることができるようになるのです。私たちすべてが、主イエス様のご臨在をあらわすことのできる者でありたいものです。

どうしたら私たちは自分を知ることができるのでしょうか。みことばによつて、また他の信者のことばによつても、光を与えられる場合があります。そして三つ目に、光のうちを歩むことが必要です。ヨハネの手紙第一の1章5、7節に次のようにあります。

イエスの救い(11)どうしたら主のしもべとなれるのか

ただいて、初めて善悪を知ることができ、また主ご自身をよりよく知ることができるのです。

しかし実際に、その光はどのようにして来るのでしょうか。主の光は多くの場合、聖書のみことばを通して与えられます。詩篇に次のように書いてあります。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのな
い者に悟りを与えます。
(詩篇 119・130)

みことばの光によつて、私たちはそれまで知らなかった過ちを教えられます。そしてそれまで、盲目であつたことを知ります。みことばは光をもたらし、そして光があるならば、私たちは見ることができ、すへブル人の手紙4章12節のみことばが現実となります。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣^{つるぎ}よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髓の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別すること

神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。
(1ヨハネ 1・5)

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。
(1ヨハネ 1・7)

ここでは、主が光であり、主の光の中を歩まなければならぬ、主のみそば近くに絶えずとどまり続けなさいと語っています。光はその性質として、受け入れるところにはどこへでも入って行きます。どんなに雨戸を閉めても板の隙間^{すま}から光は部屋の中に忍び込んできます。私たちが心を開き、主の光を受け入れるなら、疑いと恐れが消えてなくなります。神が光であられるごとく、光のうちを歩むということは、地上で最も尊い価値ある歩みです。光のうちを歩む人たちは、自ら

のうちに善悪を求めず、主の御心をわきまえ知っている人です。詩篇43篇3節にこう書いてあります。

どうか、あなたの光とまことを送り、私を導いてください。あなたの聖なる山、あなたのお住まいに向かつてそれらが、私を連れて行きますように。(詩篇 43・3)

私たちの心の態度が常に詩篇の作者のようでありたいものです。「主よ、私は自分を改める備えがあります。どうか私のあやまりを示して下さい」と祈り、神が「光よ、あれ」と言われるなら、今にでもただちに光が射し込み、あなたは恐れとおののきなく主に仕えることができます。

明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかになります。明らかにされたものはみな、光だからです。

(エペソ 5・13、14)

うことができるのでしょうか。私たちの心の目は、主イエス様だけに向けられているのでしょうか。雅歌には次のように書いてあります。

ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ。

(雅歌 1・15)

鳩は、ただ一つのものしか見ることができないそうです。ここで主は、ご自分の者たち、教会に向かい、主の花嫁に向かって「あなたは、何と美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ。」とみ声をかけておられます。歴代誌第二の16章9節にはこう書いてあります。

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心が自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてください。(2歴代 16・9)

イエスの救い(11)どうしたら主のしもべとなれるのか

光とは何でしょう。「明らかにされたものはみな、光」ですと書いてあります。主イエス様が光であられるように、私たちも光のうちに歩む時に初めて、主の御心を知り、主の御心になうご奉仕をすることができるのです。

私たちのご奉仕の目的は何でしょうか。私たちは主イエス様だけを求めているのでしょうか。上のものだけを求めているのでしょうか。有名な「山上の垂訓」の中から、マタイの福音書6章20、21節を読みましょう。

自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

(マタイ 6・20、21)

私たちの心と宝は天にあるのでしょうか。詩篇の作者のように「地には、あなたのほかに慕う者はなし」とい

私たちの心の目が向けられている所に、私たちの心も宝もあるのです。「主よ。私自身は自分のために何も求めません。私の願い、私の望み、すべてはあなたにあります」と、言いたいものです。

「山上の垂訓」でイエス様は次のように言われました。

だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

(マタイ 6・24)

私たちは主なる神に仕えているのでしょうか。それとも、この世に仕えているのでしょうか。私たちは上のものを求めているのでしょうか。それとも地のものを求めているのでしょうか。この両方に兼ね仕えることはできないのです。この二つを混ぜ合わせることは、主に喜ばれないことです。

旧約聖書に出てくるアブラハムの甥のロトは、主に喜ばれない道を選びました。ロトは神を信じる者でしたが、この世のものを求め、具合のよい生活を求め、自らの道を選びました。善悪をわきまえずにロトはソドムに行き、この世と妥協し、罪を犯し、不安の中に陥りました。

これに対しアブラハムは、ただだけを見上げ、主だけを目指して歩きました。その結果、アブラハムは贅沢はしませんでしたが、心では王者の生活をし、主の豊かな祝福のうちを歩きました。創世記18章17節にこう書き記されています。

主はこう考えられた。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。」

(創世記 18・17)

考えてみてください。全知全能なる主はこう考えたのです。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに

隠しておくべきだろうか。」すなわち主は、アブラハムに光を与え、ご自分のご計画をお示しになったのです。ロトとアブラハムを比較してみてください。私たちはどちらに似ているでしょうか。私たちは主の御心をわきまえて進んでいるのでしょうか。

私たちもダビデのように言いたいものです。「私は自ら求めるものは何ありません。地上で、私の慕うものはただあなただけです。自らは何にも欲しません。ただ主よ。あなただけが外に現われ出て下さいますように。」

主が光であられるように、私たちも光のうちを歩み、永遠に朽ちない実を結んでいくことができたら幸いです。

本メッセージは、「ロバの子サーバー」の「ベック兄 暦年ファイル」に録音されています。

次回掲載予定は、「イエスの救い(12)ご奉仕のための備え」です。

イザヤ書53章6節～11節

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行った。

しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。

彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。

彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。

彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。

彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。

イエスの救い(11)どうしたら主のしもべとなれるのか

神のわざが現われるためです

黒田禮吉

人は良いことをすれば必ず報われ、逆に悪いことをすればその罰を受けるといふ考えがあります。自分の身に起こらなくても、必ず自分の子供とか子孫に影響が及ぶとする伝統的な考え方です。

私は子供の頃から、この「因果応報^{いんがおうほう}」ということを両親から聞かされて育ちました。しかし、高校生の頃から、どうしてもその考えに納得できなくなりました。自分の犯した罪によって自分の身に報いが起こるのなら分かる。しかし、どうしても両親や遠い先祖が犯した罪が子孫に及ぶのかが理解できませんでした。そして、聖書に書かれている「生まれつきの盲人」のように、人生の出発点で初めからハンディキャップがあるという

のは、不公平で全く納得できないことでした。

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」

(ヨハネ 9:1-3)

集會に導かれた三十八年前、私はイエスさまが仰つた、「神のわざがこの人に現われるためです。」という聖書の箇所を知りました。そして新鮮な驚きを覚えま

した。当時はその深い意味が分かりませんでした。これこそ私の求めていた疑問に対する答えであると直感しました。イエスさまは、生まれつきの盲人の苦しみは誰のせいでもない、これから神さまがなさる素晴らしいみわざを、この人が経験するためなのだ、と言われたのです。

これが「苦難の意味」という、人類永遠の問いに対して、イエスさまが真正面から語られた答えでした。それまで、人間が考え出したどんな哲学でも、宗教でも見出すことができなかった、実に衝撃的、革命的な解答ではないでしょうか。私の信仰の原点となったみことばの一つであります。

生まれつきの盲人は、恐らくこれまで両親の罪の結果として盲目にされたと言われ、やりきれない思いであったことでしょう。差別されてきた自分の不運を呪ったことでしょう。弟子たちですらそう考えたのです。しかし、イエスさまは違っていました。神のわざ、つまり神さまの栄光が自分を通して現れると言われた

のです。

どんなに悲しく、つらく、苦しい問題であっても、理解できないことであっても、それは神さまの素晴らしさが、その人を通して現れるためなのです。それは主なる神のせいです。けれども罪の罰や、呪いなどではなく、むしろ、この人は特別に主に愛されており、これからの人生に神のわざが現れるのだと教えられたのではないのでしょうか。

神のわざとは

すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」(ヨハネ 6:28、29)

神が遣わした者、即ちイエスさまを信じるこそが神のわざであると書かれています。イエスさまを信じる

神のわざが現われるためです

信仰によって神さまのみわざ、栄光が現わされると語っているのではないでしょうか。

この生まれつきの盲人にイエスさまがどのように働かれたのでしょうか。

イエスは、こう言うてから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。「行つて、シロアム(訳して言えば、遣わされた者)の池で洗いなさい。」そこで、彼は行つて、洗つた。すると、見えるようになって、帰って行つた。

(ヨハネ 9:6,7)

私たちが主なる神の力を体験する秘訣は御前にへりくだることです。自分が無力であわれでみじめな者であり、自分には神さまの助けがどうしても必要だと認めることです。だから、神さまのやり方に無条件に従おうとすることです。

イエスさまは、時々私たちの予想をまったく超えた

やり方をなさいます。つばきで泥を作つて目に塗り、恐らく何百メートルも離れているシロアムの池に行つて目を洗えと言われました。この池は、エルサレムの南の端にありました。盲人にとつて、シロアムの池にたどりつくには相当な困難がありました。こんなことで目が見えるようになったなんて話は、今まで聞いたこともなかったでしょう。へりくだり、身を低くしないといけないことです。

なぜ、盲人はイエスさまのことばに従つたのでしょうか。イエスさまのことばを聞いて納得したからでしょうか。そうではありません。この方は何故こんなことをするのだろうか。これにどんな意味があるのだろうか。そういうことは何も分からなかったに違いな

いのです。けれども、彼はイエスさまに信頼してみことばに従いました。

旧約聖書に出てくるナアマンはイスラエルの敵国であるアラムの將軍でありました。彼はらい病にかか

てしまいました。絶望するナアマンに一つの知らせが届きました。イスラエルには驚くべき奇跡を行うエリシャという預言者がいるということを聞いたのです。ナアマンはたくさんの贈り物をもってエリシャの家を訪ねました。

エリシャは、彼に使いをやつて、言つた。「ヨルダン川へ行つて七たびあなたの身を洗いなさい。そうすれば、あなたのからだは元どおりになつてきよくなります。」しかしナアマンは怒つて去り、そして言つた。「何ということだ。私は彼がきつと出て来て、立ち、彼の神、主の名を呼んで、この患部の上で彼の手を動かし、このらい病を直してくれると思つていたのに。ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさつていてではないか。これらの川で洗つて、私がきよくなれないのだろうか。」こうして、彼は怒つて帰途についた。そのとき、彼のしもべたちが近づいて彼に言つた。「わが父よ。あの預言者が、もしも、むずかしいことをあなたに命じ

たとしたら、あなたはきつとそれをなさつたものではありませんか。ただ、彼はあなたに『身を洗つて、きよくなりなさい。』と言つただけではありませんか。」そこで、ナアマンは下つて行き、神の人の言つたとおりに、ヨルダン川に七たび身を浸した。すると彼のからだは元どおりになつて、幼子のからだのようになり、きよくなった。

(2列王記 5:10-14)

ナアマンがへりくだつてエリシャに従つたときに奇跡が起きたのであります。

神さまのみわざは理屈によつて働くものではありません。それを信じる信仰のあるところに働かれるのです。ヨルダン川に何か不思議な力があるとは考えられないことです。シロアムの池もそうです。それ自体に何か力があるわけではありません。しかし、エリシャを通して語られた神のことば、イエスさまが語られたみことばを信じ、それに従う。そこに神のみわざが起こつたのです。

神のみわざが現われるためです

イエスさまの十字架の救いも同じであります。二千年前の十字架のみわざを信じるだけで、何もしなくても救われる。どんな人であっても、へりくだればそのまま救われる、神さまの子どもにしていただけ。私たちの普通の感覚では、とても愚かに思えます。しかし主の救いの方法は、十字架を信じるという愚かな方法なのです。

イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけて出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がその方を信じるのができますように。」イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。

(ヨハネ 9:35-38)

この盲人の願いは目が見えるようになることであっ

たに違いありません。しかし、彼は単に肉体的に目が開かれただけでなく、霊的にも目が開かれたことが分かります。ユダヤ人の社会から追放され、排除された彼を、イエスさまが見つけ出してくださいました。そして、世間から、路傍ろぼうの石と同様にされていた男が、イエスさまを「救い主」と信じる信仰の人生を歩むようになったのです。

この盲人は二度イエスさまから目を開けてもらいました。一度目は肉体の目を開けてもらった時、二度目は心の目を開けてもらった時です。そして本当の癒やし、救いは心の目が開けられたこの二回目の時なのであります。体の癒やしは一時的なものです。目の見えない人が見えるようになって、やがてその肉体は衰え死んでしまいます。しかし、魂の救いは異なりまゝ。死んでも生きます。この人は体の癒やしだけでなく、魂の救いを得たのです。

人間は一時的な解決、肉体的な癒やしだけを求めます。しかし、主なる神は一時的な癒やしだけでなく、永

遠の問題に対する解決、即ちイエスさまを信じて御許みもとに来ることを望まれます。そして罪の問題を解決してくださるのです。これが神のみわざ、神のみこころではないでしょうか。

神のみわざが現わされるために

彼が近寄って来たので、「わたしに何をしてほしいのか。」と尋ねられると、彼は、「主よ。目が見えるようになることです。」と言った。イエスが彼に、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを直したのです。」と言われると、彼はたちどころに目が見えるようになり、神をあがめながらイエスについて行った。これを見て民はみな神を賛美した。

(ルカ 18:41-43)

目が見えるようになるためには、さらに言えば、救われるために私たちに必要なことは何でしょうか。

まず、第一に、私たちは盲目であり、見えない者であ

神のみわざが現われるためです

るとの、現状の認識がどうしても必要です。

その上で、主に信頼して、「見えるようになりたい」「救われたい」と切実に願う求めることではないでしょうか。そうすれば主はあわれんで下さり、私たちの願い、私たちの信仰に目を留めてくださり、まことの目を開けてくださるのではないのでしょうか。

苦しみの意味と目的

イエスさまは、本人の罪でもなく、両親の罪でもないと言われました。どこに原因があるとか、そういうことは言っておられません。その代わり、イエスさまは「神のみわざがこの人に現われるためである」と言われたのでした。

「だれのせいですか」という弟子たちの問いかけと、イエスさまの答えとの間には大きな食い違いがあります。弟子たちは、この人が生まれつき負ってきた苦しみの原因と責任ということを尋ねたのです。しかし、

イエスさまは彼が生まれつき負ってきた苦しみの意味と目的を教えられました。「神の栄光が現われるためである」とお答えになったのです。それは、苦難の問題は原因を追及することではなく、その意味と目的を知ることには救いがあるのであります。

私たちはこの世を不条理だと感じています。「どうして私はこんな苦難を負わされているのだろう」と思うような事があるかも知れませんが。しかし、苦難から救われるためには、「どうしてか」と原因を問うのではないと、イエスさまは教えておられるのです。

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたち、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。…そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは

病氣の原因として確かに罪によるものもあるでしょう。サタンや悪霊によるものもあるでしょう。しかし、原因がどうであれ、その目的とするところは、主が栄光をお受けになるためであります。そして、病氣も試練も「主なる神の栄光が現われるためだ」と知ることが大切です。そうすれば、私たちは希望をもって前向きに生きることができるようではないでしょうか。

そればかりではなく、患難かんなんさえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

(ローマ 5:3-5)

パウロは、苦難を通して自分が神さまの目的に向かって成長するのだということを信じました。だから

神のわざが現われるためです

非常によかった。

(創世記 1:26、27、31)

人は神の栄光のために造られました。人生は神の栄光を現すために与えられました。人間の上に降りかかる問題は神の素晴らしさを示すために許されたのです。実に人生は私たちがなぜと問うものではなく、「あなたはどのようなのか?」と問われているものなのではないでしょうか。

神の栄光を現わしていただくために

なぜこんな目に遭あうのだろうと問うかわりに、神の素晴らしさを現わしていただくために、私はどうしたらよいかを考えましょう。イエスさまが助けてくださると言うなら、私はどうしたらよいかと主に問うことです。誰のせいだろうではなく、私はどうすれば神の栄光を現わしていただけるだろう、と主に祈ることが必要なのではないのでしょうか。

患難をさえ喜ぶことができると証ししたのです。それは彼の努力によるものではありません。与えられた聖霊によって神の愛が注がれたからであります。

苦難の原因ばかり考えているうちは、心が過去に向かい、後ろ向きになってしまします。しかし、神さまが与えられる苦難の目的と、備えられる助けを信じる信仰によって、未来に目を向けることができます。前へと進んで行くことができるようになるのではないのでしょうか。

パウロ自身も病に悩まされました。そして、彼はこの病を除いてくださいと、三回も祈りました。でも癒やされませんでした。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。(2コリント 12:9)

パウロが、どうして病氣になったかという過ちを犯したからではありません。主に頼る者になるためです。主に頼ることによって、主は弱さのうちに働くことができます。主はご自分の栄光を現わすことがおできになります。ですから、彼が病氣になることは、どうしても必要だったのです。

苦しみを誰かのせいにしても救われません。自分を責めても、親や回りを責めても、何の解決もありません。「不幸」というのは、「苦しみがあるから不幸」なのではありません。苦しみを、どのように生きて行くかを選ぶ時に、人は不幸にもなり、また新しい喜びを知ることにのみなり得るのではないでしょうか。苦難をきっかけとして、イエス・キリストに出会うならば、そこには神の国が開かれているのであり、幸福への入り口となるのだと、この生まれつきの盲人のできごとは教えてくれます。

い。「イエスは、彼に言われた。」「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」
(ルカ 23:33〜34、39〜43)

イエス・キリストが十字架にかけられるときゴルゴダの丘に三本の十字架が立てられました。その時、イエスさまと二人の強盗が並べて十字架につけられました。同じ苦難を受けたのです。

強盗の一人は、十字架の苦しみの中でイエス・キリストを信じて喜びのうちに天国に入って行きました。「われわれは、自分のしたことことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ」。彼はこのように告白したことにより、神のわざがこの強盗に現わされたのであります。

けれども、もう一人の強盗は、恐らくイエス・キリストをのしりながら、絶望のうちに死んだのです。つまり、二人は同じ肉体の苦しみを受けていました。でも、その苦難の「意味」は天と地ほど違ってしまったの

神のわざが現われるためです

終わりに

「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとりには右に、ひとりは左に。そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

…十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れなのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位くらにお着きになるとときには、私を思い出してください。」

です。

すべての人に、それぞれの苦しみがあります。しかし、その中でイエス・キリストに出会う時に、その意味はそれまでの否定的、後ろ向き、恨みの考えから、肯定的、前向き、感謝の考えへと、百八十度変わりうるのです。

私たちの今与えられている苦難は何でしょうか。それを嘆き、否定し、恨むだけではなく、イエスさまのみもとに行って、「神のわざ」を現わしていただくではありませんか。そうすれば、私たちの苦しみも、希望と幸福と、喜びと感謝に満たされた、本当のいのちへの入り口に変わるのではないのでしょうか。



黒田 禮吉 (吉祥寺キリスト集会)

夫の病氣を通して主を知った喜び

関根 恵美子



ご家族と恵美子さん(右)

夫、弘兄弟との四年半の闘病生活を証しします。

私は、一九四四年一月二十七日、東京都足立区に池田四郎吉、西野あきの長女として生まれ、六十八歳まで足立区に住んでいました。父は私の生まれる前に戦死しました。従って私は父を知りません。女手ひとつで子供を育てることは大変なことだったと思います。母は幼い頃、高熱で耳が聞こえなくなり、そのため大きな声で話します。又、耳がきこえないため、他の人が話をしていないのを見て、憶測で自分の悪口を言っているのではないかと疑って、いつも周囲の人とトラブルを起こしていました。そのような母でしたので、幼い頃から私は誰にも心の内を言えず暗い性格の子でした。小学校の通知表をみると、真面目で性格が暗いといつも書かれていました。いつも固い表情で笑わない子供でした。

高校を卒業し、自動車の部品メーカーに勤務し、弘兄弟とお見合いをして結婚しました。結婚後半年間、

夫はサラリーマンをしていましたが、退職し薬店を開業しました。私も手伝っていました。弘兄弟は商品を売るだけの商売には不満でした。漢方に詳しくかったので鍼の勉強をしたいと、娘が小学校に入学すると同時に専門学校に通い始めました。薬店の仕事は私一人で出来ますので応援しました。弘兄弟は、今までと違って、生き生きとした様子で、私もその姿を見るのが嬉しかったのを覚えています。鍼と柔道整復師の資格をとり、家を建て替え、夫は接骨院を、私は薬店をやっていました。

しばらくして弘兄弟は仕事のことで悩むようになり、ちょうどその頃、新聞に教会案内の折り込みチラシが入っているのをみつけました。お正月の元旦に突然、その教会に行くというのでびっくりしましたが、一緒に歩いて行きました。そこは異言を語る教会で何が何だかわかりませんでしたが、信仰の不一致が原因で離婚になると大変だと思い従っていました。その教会に

は一年半おりましたが、少しも喜びがなく、内心では折っている方がいると、「早く終わればいいな」といつも思っていました。その後、二か所の教会を転々としてきました。喜びはまったくありませんでした。その頃、接骨院の患者さんが私達夫婦が教会に行っていることを知っておられ、キリスト集会の証し集『光よあれ』を持って来てくださいました。その方が通院している近所のクリニックの院長先生が、吉祥寺キリスト集会に集われていたのです。弘兄弟と私は『光よあれ』を読み、こんなに喜びのある教会に是非行ってみたいと思って、一九九五年七月に初めて吉祥寺キリスト集会に行きました。驚いたのは大勢の方が集まっておられ、ぎゅうぎゅう詰めだった事でした。また皆さんとても喜んでくれるのです。今まで三か所の教会に集いましたが、このような光景はありませんでした。皆さんの喜んでおられる姿を見て、うらやましく、早く私達夫婦も皆さんのようになりたいと思いました。ここに集えば

私達も喜ぶことができるのではと思い期待しましたが、結果は前と同じでした。そして商売もが順調で忙しくしている間に、信仰がなくても暮していけるのではないかと思いうようになり、イエス様の事をあんなに求めているにもかかわらず、いつしか生ぬるいクリスチャンになっていました。

わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。
(黙示録 3・15)

いつまでも商売が繁盛することはありませんでした。大手のドラッグストアが次々と出来、小さな薬店は太刀打ち出来なくなりました。又、兄弟も接骨院の仕事に疑問を持つようになっていました。家の方もそろそろリフォームの時期がきており、一階は薬店で二階、三階が住居部分です。二階(外階段)まで買い物を持つ

て上がるのが大変で、これから先のことを思い、他の場所に移転することを考え始めました。当時、普段は春日部キリスト集会に集っていましたが、ドライブがてら鹿嶋に行ってみようかと軽い気持ちで鹿嶋キリスト集会に二、三度でかけました。そこで、老後は田舎でゆっくり生活してみるのが良いのではないかという思いになり、あまり深く考えもせず移住しました。弘兄弟が鍼灸院を閉業し、今まで出来なかった町内のカルチャーセンターで蕎麦打ちも始めました。そんな安易な気持ちでまたしても、信仰を自分自身を喜ばすために利用した自分勝手な者でした。

主はそんな私達夫婦を放っておかれませんでした。二〇一七年九月四日の午前四時頃、弘兄弟が高熱を出し、病院に行きました。日曜日でしたが検査をすると腎盂炎との診断で、一週間入院しました。九月十日に退院し、家に帰りシャワーで身体を洗い夕食をとり、

早めに就寝しました。翌朝の午前四時頃、手先足先がびりびりするというので前日退院してきた病院に行きましたが、身体に麻痺が見られないので脳梗塞ではないとのこと、翌日、再来院するようにと言われ帰って来ました。ところがその日の昼にトイレで倒れてしまい、これは大変なことが起こっていると思いました。なぜかあまり動揺しませんでした。昼食を摂ろうとしても手が思うように動かず、ソファからも立てません。私一人では何も出来ませんので、弘兄弟がカルチャーセンターで親しかった友人に車で系列の総合病院に急患で連れて行っていただきました。

そこは今までの病院とは違い、休日であっても専門の医師がおり色々検査をした結果、まだはっきりとわからないが、ギランバレー症候群という年間十万人に一人か二人がかかる感染症ではないかと言われました。難病でした。そのまま入院になりました。二日目には集中治療室に入り一か月いました。大変なことが起

きているのに私には実感がわきません。治療法はガンマグロブリンという血液製剤を入れ、血液を入れ替えるというものでした。三回行ないましたが、効果は得られませんでした。七十七歳で発症したので効果は出なかったそうです。若い年齢であつたら元に戻ったかも知れません。その頃は病気が治るようになるといつも祈っていました。一時は少し指が動くと言っていました。その後、咽の筋肉が動かなくなり切開しました。動くようになったらまた閉じるのだろう、と軽く考えていましたが、召されるまで閉じることはありませんでした。何でそんな難病にかかってしまったのかと、神様に文句を言って、ただ病気が治るようにと祈っていました。兄弟は日に日に病状が悪化していく中で、どういう心の状態でベッドにいたかと思うと、今でもそのことを考えると、悲しくなります。三か月で転院するのですが、寝たきりの状態では、とても転院出来ず、結局六か月入院しました。次の病院も三か月で転

院です。リハビリもしていましたが、筋肉が硬くなるのを防ぐのが精一杯です。三回目に転院したのが地元の鹿嶋の病院でした。一回目と二回目の時は、知人の方や集会の皆さんに車で病院に連れて行っていただいで大変助かりました。今度はバス、電車で行ける距離でした。

三度目の病院はとても良い病院でした。療養型病院で長期入院が可能でした。スタッフの方がとても親切で召されるまで三年半おりました。入院当初からベックさんのメッセージや証しなど、病院に行く度、読んでいました。寝たきりの状態で手も動きません。コロナで段々面会が出来なくなり、窓越しの面会になり、兄弟にとって何が必要か考えて、メッセージや、私が感動した本を音読したり、手紙を書いたりしました。手が動かないので手紙はスタッフの方に読んでもらったようです。庭に咲いている花なども持つて行きました。その頃は主が働いておられるという実感はありません。

れる」と思いました。

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

(申命記 31:8)

主は鈍感な私達夫婦にもご自身を示してくださいました。あんなに長い間、主と出会えなかった私に現われてくださいました。その前まで私は、一生涯、主を知らない名ばかりのクリスチャンで終わるのではないかと失望感を持っていました。嬉しかったです。兄弟が病気になるなかったら体験出来ませんでした。兄弟も同じだったと思います。主は私達の意志とは関係なく自然に着々とご自身を現わそうとしておられたのでした。今はすべてのことを益としてくださったことで、主を実感させていただいています。感謝です。

せんでした。しかし、帰宅後、台所仕事をしている時、こんな兄弟の病気が大変な時なのに、なぜ私は平安でいられるのか不思議に思いました。不安なのに平安なのです。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわざいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ 29:11)

落ち込み方が浅く、すぐ回復できるのです。ノックダウンはされても、ノックアウトはされません。これは主の守りだと、はつきりわかりました。弘兄弟の病氣も背後に主がおられることを感じました。これらのことを通して、私たち夫婦に「わたしが主だ」と、宣言なさったのです。その時初めて、私は「主は生きておら

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8:28)

色々なことも、主の恵みとして受け取ることが出来ました。現在、茨城県の鹿嶋に住んでおりますが、当初は、交通不便だ、何もないと不満ばかり言っていました。いま主は静かな所で落ち着いて聖書を読みなさいと、おっしゃっているようです。私はクリスチャンになって、本当によかったと思います。最後に次の聖句で締めくくりたいと思います。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

(詩篇 50:15)

関根 恵美子（せきね えみこ）

一九四四年一月二七日 東京都足立区に生まれる

一九六二年三月 東京都立上野忍しのがさが高校卒業

一九七〇年十月 弘兄弟と結婚

夫 弘（ひろし） 二〇二二年三月十五日召天

娘 恵津子（えつこ） 現在都内目黒区に在住



たとえこんな私でも主は愛して下さっている

上田 正



正さん

私は一九五二年奈良県で生まれました。幼い時に麻疹（別名はしか）から中耳炎になり幼稚園は一年ほどしか行けず、体が弱くて家で寝ていることが多く、その後中耳炎が治りきらずに右耳が聞こえなくなりました。自宅で鍼灸マッサージ師をしていた父によく小児針をしてもらっていたことを思い出します。田舎であったために小学校も遠く五十分程かけて通っていました。

六人兄弟の末っ子であった私は、ずいぶん甘えん坊でまた楽天的な性格でした。しかし小学五年生の時、父が肝硬変で他界してから家族の状況は一変しました。兄や姉たちはそれぞれ働きに、また私も新聞配達を始めました。今でも兄弟愛が少なく感じるのには各自分たちが生きていくのに必死だったせいかもしれません。私自身、幸い兄のおかげで高校まで進学できました。商業高校でしたが、自分はどう少し学びたいと思っていました。でも学費の工面をどうしようと悩んでいたところ、アルバイト先の新聞販売店の店主さん

から新聞奨学金制度を紹介され、大学への道が開かれました。ただ自宅ではこの仕事は無理だったので、八尾市山本の販売店にて下宿の上、大学に通うことになりました。

しかし大学に進学したものの、いわゆる五月病のような状態になり、その上、兄夫婦と母や姉が嫁姑の問題で悩んでいて、姉から不平不満の手紙がたくさん来て、私自身も困惑している状態でした。

こんな時、販売店の同僚が山本の労働会館で若人の集いをやっているから行かないかと誘ってくれました。その集まりは教会から青年たちが来て聖書を読んだり、ムーディーの科学映画などを上映していました。私はこのことがきっかけで聖書を知り、教会に通い始め主を信じました。最初の頃は自分の罪が神によって赦され救われた喜びで大いに満たされていましたが、時が経つにつれ教会の組織に悩むことになっていきました。自分と主との関係ではなく、自分と教会の関係に

なっていました。

就職したある日、副牧師の方から呼び出され教会への献金について聞かれました。「あなたの収入は月いくらですか。この献金額は少ないのでは」と言われ、このことがきっかけで私は二度とこの教会へは行かないと決めました。献金は主にささげるもの、人や組織にささげるものではないと思ったからでした。

一九八七年夏頃、私は別の教会に行っていました。ここも教会の組織があり、満たされない思いでおりました。そんな時、勤務先に来ておられたキリスト集会の方から集会の書籍『実を結ぶ命』や証し集『光よあれ』の本をいただき読みました。しばらくして家庭集会を紹介され生駒^{いしも}での家庭集会に行きました。そこに集っておられた方々の生き生きした輝きは今でも忘れません。私はこの時本当に神を信じる一人一人の兄弟姉妹の心に主が住んで下さり光り輝いているのだと知

ることができました。そして主にある交わりのすばらしさ、兄弟愛のすばらしさを知ることができました。

だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにいます。私たちは、私たちに對する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。

(1ヨハネ 4:15、16)

一九八八年の秋、私は田中公会堂で行われていた神戸キリスト集会(現在の芦屋キリスト集会)に集うようになりました。そこで妻、祥子姉妹と出会い、一九九〇年二月にベックさんの司式で結婚しました。

彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。

(1ペテロ 2:6)

しかし私自身は、結婚後も様々な理由で転職を繰り返し家族に心配をかけていました。祥子姉妹は転職を繰り返す私にあきれていましたが、そのたびに「必ず主は養ってくださるよ」とこんな愚かな私を励まし、また共に祈ってくれました。主はその都度不思議な方法で必要を満たし養ってくださいました。

強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おいのいてはならない。あなたの神、主ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。(申命記 31:6)

二〇一六年八月 建築関係の会社で働いておりましたが職場の人間関係に苦しみ自分の失敗などが重なり極度にストレスをためてしまい、その結果耳ヘルペスから顔面神経麻痺になってしまいました。結局、数か月後には退職することになりました。

私はこんな時こそ、心を主に注ぎだして祈るべきだ
 と思い主の前に静まり祈りました。「主よ、あなたのみ
 ころが成るように。」と。そんな中でも主はこんな
 自分を愛していただくさ、次のみことばをください
 ました。

(エゼキエル 34:11-16)

…わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世
 話をする。牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中
 にいて、その群れの世話をするように、わたしはわたし
 の羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救
 い出して、世話をする。わたしは国々の民の中から彼ら
 を連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に
 連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またそ
 の国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。わた
 しは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼
 らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエ
 ルの山々の肥えた牧場で草をはむ。わたしがわたしの羊

主はこんな時にも私を安らかな平安の道へと導いて
 くださいました。
 転職や同じ失敗を何度も繰り返す姿をみていた様子
 姉妹は、「あなたはきつとアスペルガー（発達障害）な
 のではないか」と言いました。この言葉が気になりア
 スペルガー症候群について調べてみると、次のような
 ことが書かれていました。

・何かをするときは一人でやるほうがいい
 ・同じやり方を何度も繰り返すことが好き

・何かを想像するとき、イメージを簡単に思い浮か
 べることができる

・自分では丁寧にしたつもりでも、話し方が失礼
 だと周囲の人に言われることがある

・他のことが全く気にならないくらい、何かに没頭
 してしまうことがある

・他の人が気づかないような小さな物音に気がつく
 ことがある

・車のナンバーや時刻表の数字など、特に意味のな
 い情報に注目することがある

・相手の顔色を見てもその人が何を考えているか、
 何を感じているかがわからない

・あることを、他の人がどのように感じるのかを想
 像するのが苦手

・他の人の考え(意図)を理解することは苦手

以上のようなことはほとんど自分に当てはまってい

を飼い、わたしが彼らをいこわせる。——神である主の
 御告げ。——わたしは失われたものを捜し、迷い出た
 ものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力
 づける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わ
 たしは正しいさばきをもって彼らを養う。

たことでした。

その他にも、注意されても同じ失敗を何度も繰り返
 してしまいます。他の人の気持ちを感じたり、空気を
 読んだりするのが難しいです。右耳が聞こえないこと
 で、人と話をしていても適当な返事をしてしまったり
 その場を取り繕うために言い訳をしたりすることもあり
 ます。つい先日も同じことをしてしまい、「何度言っ
 たらわかるの?」と言われるほどでした。
 でも本当にこんなものでさえイエス様は愛してくだ
 さっています。

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。
 あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、
 私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩
 みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知って
 おられます。
 (詩篇 139:1-3)

主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをか
なえてくださる。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成
し遂げてくださる。
(詩篇 37・4、5)

七十歳の今、わざわざ発達検査をするのもと思い、
していません。相手の気持ちが汲み取れない。自分の
都合や予定を優先する。暗黙のルールがわからない。
言われている言葉が心に届かず同じ事をやってしまっ
て、人間関係がうまくいかず苦しんでいましたが、
これが自分の特性で弱さと理解しうけとめることがで
きました。私自身力もないのに自分で頑張ろうとして
いるのを見て、祥子姉妹からは「あなたの弱さは、主
に頼るために与えられているのだから主に頼らない
と」とよく言われます。

アスペルガーの傾向があるとわかってからも、相
変わらずとんちんかんなことを言ったりおこなったり

してしまいましたが、主がいつもいてくださいますから
感謝です。祈って主と共に歩んでいきたいと思ってい
ます。

わたしはあなたのために立てている計画をよく
知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわざ
いではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに
将来と希望を与えるためのものだ。

(エレミヤ 29・11)

あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにす
る。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わ
たしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わた
しは背負って、救い出そう。

(イザヤ 46・4)

上田正(うへだただし)

一九五二年十月奈良県生まれ 現在、奈良県橿原市在住

妻 祥子(しょうこ)

長男 羊介(ようすけ)

長女 ひかり



大切なことは、感謝して死ねること

一瀬 かほる



集会の方々と、かほるさん(一番右)、お母様の唐澤梅子さん(かほるさんの隣り)

私は、現在九十四歳の母と二人で練馬区の石神井公園に住んでいます。主人は二十一年前にがんで召されていて、三人の子供たちはそれぞれ別々に暮らしております。

私は両親と姉、弟の五人家族、新宿区で育ちました。実家はごく普通の日本の家庭で、長野の田舎に行けば仏壇があり、お盆の時期になると父がお経を唱えていて、それが普通のことと思って成長しました。しかし、両親は子供の教育はキリスト教が基盤の学校が良いと思ったらしく、姉は中学受験をしてミッシオン・スクールに通っており、日曜学校にも行っていました。私も姉の後について教会へは行きましたが、どんなことを話していたか覚えていません。私は好きな習い事やスポーツも勉強もさせてもらい、充分に幸せな人生だと感じていましたので、若い頃に生きる意味を深く考えることもなく結婚し、男の子を二人育てていました。

姉、長澤文枝の死

人生に思いがけないことが起こったのは二十八歳の時、二歳違いの姉長澤文枝ががんになったことでした。三十五年前の当時、がんはまだ治療が難しいとされていて、死を覚悟する病気でした。

姉は家族の中で一番穏やかで頼りになる、親思いの優しい人でしたから、私はもしもの事を考えるだけで恐ろしく、大いに悩み苦しみました。

がんの手術が終わって退院した頃、姉は吉祥寺キリスト集会で洗礼を受け、その頃から実家に帰るとイエス様がどうした、とか軽井沢のキャンプがどうした、という話を母と楽しそうにしておりました。けれども私は自分には全く関係のない話だと思っていましたので聞いていませんでした。

しかし、姉の再入院の際、病室に置いてあった聖書をなぜだかわかりませんが、自分から初めて開いてみたのです。姉の聖書には赤線がたくさん引いてありま

した。マタイの福音書6章に目が留まりました。

自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。

(マタイ 6:20、21)

当時の私の宝は夫と子供たちでした。「家族が宝ではだめなのかしら? 天国は本当にあるのかしら?」という疑問で頭がいっぱいになりました。

ベック宣教師がお見舞いに来られた時、この方は天国への「はしご」のお役目をしていると感じました。姉は痛みがあってもいつでも祈っておりました。その平安のうちに天に召された姿を見て、私はこれからどのように生きていけば良いのか、私も姉のように死にたい、という思いを持って集会に通うようになりました。

6人の証し

Unser Herr lebt

姉の召天から三十五年の月日がたちました。この間、私が聖書のみことばにどのように導かれたかをお証ししたいと思います。

初めて集会に行き、ベックさんから「ここを読んでごらん」と言われて読んだのが次のみことばでした。

ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはいはりサイ人で、もうひとりはいはり取税人であつた。いはりサイ人は、立つて、心の中でこんな祈りをした。「神よ、私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。」ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。」
(ルカ 18:10-13)

じられたかはわかりません。悔い改めの祈りをし、イエスを自分の救い主として信じました。とはいえ、人間は自分で自分を変えることはできません。その後、「悔い改めの祈りをしたけれども、やっぱり自分は悪くない」という思いが芽生え、心の中での葛藤が始まりました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。もし自分のしたくないことをしているとすれば、律法は良いものであることを認めているわけです。ですから、それを行なっているのは、もはや私ではなく、私のうちに住みついている罪なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
(ローマ 7:15-18)

私はこの取税人と同じだと感じました。今まで、親にも夫にも、子供たちにも、自分はこう思う、こうしたい、こうしなさい、と自分の考えを押しつけてきました。そのことが間違っていたのかもしれない、赦して頂かなければ、これから一歩も前に進めないという気持ちになりました。そして初めて悔い改めの祈りをしました。その時ベックさんからお聞きしたお話の内容です。——人間と神様の間には高い壁があります、人間が神様の約束を破ったからです。その壁を低くしないと神様のところに帰れません。そのためにイエス様が十字架にかかって、かほるのために代わりに死んでくださったので神様とかほるの間にはもう壁がないんです。だから、「イエス様ごめんなさい。ありがとうございます。これからお願いします」とお祈りすると天国にいけるんだよ。——

はじめてのお話でしたが、「ああ、そうなんだ」と思えて泣いて家に帰ったのを覚えています。どうして信

姉が召される少し前から家族の心配ごとだった、弟の心の病気が顕著になり、両親はじめ私も主人も、彼にどのような治療が必要かこの世の手立てを考え尽くしました。そして悩みの中で与えられたみことばです。

するとそこに、男たちが、中風をわずらっている人を、床のままで運んで来た。そして、何とかして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとしていた。しかし、大ぜい人がいて、どうにも病人を運び込む方法が見つからないので、屋上に上って屋根の瓦をはがし、そこから彼の寝床を、ちょうど人々の真中のイエスの前に、つり降ろした。彼らの信仰を見て、イエスは「友よ。あなたの罪は赦されました。」と言われた。(ルカ 5:18-20)

弟を変えるのではなく、主イエス様が私の信仰を見て、弟の病気を癒してくださるのであれば嬉しいと思いい、楽になったのを覚えています。

その後、父がイエス様を受け入れ救われました。父は六十九歳で召されましたが、その葬儀を通して、主人が救われました。「どうして信じたの?」と聞くと、「お父さんは本物を信じたと思ったから」と話してくれました。主人は、穏やかな性格で誰からも好かれていましたが、ある時、「仕事は大変な重荷なんだよ」と言うのを聞き、彼にもイエス様の救いが必要だと思われされました。

夫、一瀬賢治の病気

二〇〇〇年八月、主人の突然の病気。体の不調を感じてから翌年一月に召されるまで、たった五か月でした。病気が分かった時、手術もできない、薬も効かないと宣告されました。

信仰があるといっても、すべて主人に頼っていたので、その主人が目の前からいなくなることを思った時の恐怖と、これから私と子供たちはどのように生きて

てくださると約束してくださっていることに力を頂きました。

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもつて、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。(ピリピ 4:19)

みことばの約束どおり、この二十年の間も主が家族を養ってくださり、母と共に住む恵みに与りました。

母、唐澤梅子のこと

母、唐澤梅子は、長野県伊那市に生まれ、父と結婚して新宿に住むようになり、父の経営する写真製版の会社を助けていつも誰かのお世話をして生きてきた人生でした。父は会社経営が第一で、声が大きくいつも怒っているように見えたので、母が父と他の人の人間関係を穏やかに取り持っているようでした。

いくのかという不安で頭の中が真っ白になりました。病気の主人を思いやることより、自分の身を心配する自分に気がつき、どこまでいっても自分を大事にしたい自己中心の罪の深さに愕然(がくせん)としました。こんな私の罪を赦してくださいのためにイエス様が十字架にかかって死んでくださった、流された血潮にあらためて感謝しました。古い自分を後ろに投げ捨てることで、イエス様は新しいいのちを私にくださいました。天国で主人にまた会えるという希望が、私の一番の楽しみとなっていました。

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。(イザヤ 42:16)

主人がいない人生においても、イエス様が光になっ

母が六十歳ごろ、長女、長澤文枝のがんという病を通して、イエス様の永遠のいのちを信じたい、娘と同じ道を歩みたいと父に話し、あつさり洗礼をうけました。なぜ父が許したのか、とても不思議でした。あんなに先祖様の位牌(いはい)の前にお経をあげてきた父なのに、

姉が召されて、自分が集会に行きたい気持ちもあり、私なりに母の喜ぶことをしてあげようと、集会に一緒に行くことになりました。

弟が海外留学後にこころの病を発病した時も、母はイエス様に頼り、祈りの生活でした。

父は先祖供養(くよう)があるから、自分は仏教でいいと言っていました。その父が息子の病を通して、ギブアップし、ベック宣教師から「息子のことは全知全能のイエス様におまかせしましょう」と言われ、あつさりイエス様に白旗をあげて救われました。背後にたくさんのお祈りがあったことを感謝しています。父は救われてから、集会の兄弟姉妹と楽しそうにお交わりしたり

伊那の家での家庭集會に参加したり、と別人になりました。礼拝で聖歌を歌っている姿を見るだけで、神様は人を変えることが出来るお方だと驚きました。神様は本当に全知全能のお方です。

心臓が悪かった父は脳梗塞、胃がんを患い六十九歳で召されました。葬儀の後、母は心の病を患った息子と二人で住むことになり、毎日が試練の連続だったと思います。

母には優しい弟でしたが、社会復帰は困難でした。イエス様だけがすべてご存じですから希望でした。神楽坂の家^{らざか}家庭集會が起こされたのもその頃で、毎回集會に大勢の方が家に来てくださるたびに、私は弟が不安定になるのではないかと、余計な思い^{わづら}煩いで心がいっぱいになり、「不信仰な者です」といつも悔い改めるのでした。

二〇一〇年、母が八十二歳の時、弟は糖尿病が悪化し先に天国に行きました。息子を残して、先に天国に

は行けないと言っていた母の祈りをイエス様は聞いてくださいました。

母は夫を見送り、大切な娘、息子が先に天国に行ってしまったのですから、どんなに悲しく辛いことだったかと思いますが、イエス様がその悲しみを背負って担ってくださいました。それから数年間、冬の寒い時期には、一人で沖繩にアパートを借りて、一月から四月まで移住するという生活を楽しみ、沖繩キリスト集會の兄弟姉妹と礼拝をする恵みにあずかりました。人生の中で一番自由に、また御霊のお交わりをたくさん頂いて過ごせた時期であったと思います。

八十五歳ごろ、頭がおかしいと自分から医者に行きたいと言い、検査をうけました。アルツハイマー型認知症と診断されましたが、日常は変わらずに過ごせました。忘れてしまうことを家族も本人も受け入れていけば、一緒に住むことはできます。自分の思いを捨てる訓練になりました。お互いに正しいと言い張らない、

許しあうこと、そして感情を次の日まで持ち越さないこと、などなど。家事は何でもこなしてきた母なので料理ができなくなったり、車の免許証を返納した時は涙を流していました。車の運転ができないと、田舎の家に行くことは不可能になります。大切にしてきた習慣が一つ一つ取られていきました。

二〇二二年四月に今の住居に引っ越し、母と二人の生活になって半年が過ぎました。毎朝起きると、母は「今日もお世話になります、よろしく願います。」と言って頭を下げてリビングに入ってきます。今私は、老いることを学び、忘れていた、親に感謝すること、人生の最後に大切なことは感謝して死ぬること、を日々体験しています。

イエス様、大切なことを教えてくださりありがとうございます。

終わりに、母の部屋に貼ってあった『老境に入りつ

つある婦人の祈り』を記します。

『老境に入りつつある婦人の祈り』

主よ、あなたは私が老いつつあること、いつかは本当に老いることを私自身よりもよくご存知です。どうか私がくだらないお喋りに時を過ごすことがありませんように。他の人のことに介入し、すべてを正そうという思い上がりから解放して下さい。考え深くはあっても不機嫌になることなく、手を貸しても押し付けがましくありませんように。

体と心の痛みを訴える人の言葉に同情を持って耳を傾け、自分の苦痛について口を閉ざすことができますように。どうか忍耐をもって苦痛を忍ぶことができますように。

私の記憶が他の人と食い違うような時、過剰な自信をふりまわして相手を言い負かすことがないように。私にいささかでも愛すべき性質があるとすれば、



集会の方々と、快典さん(右から2人目)

主は私を捕えてくださった

鈴木 快典

私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。(ピリピ 3・12)

私は、^{たまたま}環との結婚がきっかけで、イエス様の存在を意識して知るようになり、救われました。

生い立ち

私は、一九七六年に父八郎、母きよいの長男として生まれました。四つ下に妹がいて、両親、妹の四大家族です。私以外の家族はイエス様の救いに、まだあずかっていません。家族の救いは聖書の約束ですから、家族の救いはすでに実現していると確信し、主に感謝の祈りを寝る前にささげています。

出身は、神奈川県川崎市です。両親は共働きでした。

それを保ち続けることができますように。

聖人になりたいとは思いません、聖人と一緒に暮らすのはやりきれないこともあるでしょう。思いがけないところに楽しいこと、思いがけない人の内に才能を見出す能力をお与えください。

他の人の美点を称賛する大らかさも持てますように。

一瀬かほる(いちせかほる)

一九五四年十月三十一日 新宿区生まれ、恵泉女学園短期大学、田中千代服飾短期大学、レナウン勤務

夫 一瀬賢治(二〇〇二年召天)

長男 謙太郎、二男 雄治、長女 山下祐実

母 唐澤梅子



そのため保育園の頃から小学校三年生ぐらいまでは、家に帰っても両親がいないので、近所の知り合いの家であずかってもらい、母親が遅くなる時は晩御飯も食べさせてもらうこともありました。今ふりかえれば、子供心にさみしさを感じることもあったように思います。

地元の小学校、中学校を卒業し、高校は家から通える私立高校に入學しました。大學受験では何のために大學へ行くのか考えることなく、ただ流されるままに受験したため、一つも合格することなく浪人生活を迎えました。

私が現役で大學を受験した一九九五年は、あの阪神淡路大震災の年でもありました。大學に行く目標を見いだせずにいた私は、何か目標を見つけられるかもしれないと、少しの着替え、滞在費を持って、鉄道を乗り継いで兵庫県神戸市東灘区のボランティアセンターに向かいました。そこで一週間ほど他のボランティアの方々と共に家の引越しや震災で出たゴミの片付けの

手伝いをしてから帰りました。その活動を通して得たものは、人の役に立ったという思いでした。その一年後、何とか大學に合格し、大學生活を送り始めました。大學時代も福祉施設でレクリエーションのグループでボランティア活動をしましたでしたが、その時に得たものも、人の役に立ったという思いでした。その一方で何か物足りないものを感じていました。ボランティア先の方から感謝された時は、気持ちはよいのかもしれませんが、その後、本当に自分は感謝されるほどよかったのか考えさせられるようになりました。

結婚の導き

大學を卒業し、今の会社に入ることになりました。社会人になってから初めての一人暮らしで岡山に住むことになりました。社会人になるまで一人で暮らしたことがなく、地元でもないため、さみしい気持ちになることも度々でした。職場の同僚数人が同年代だっ

たので、遊びに行く機会が増えました。その中に環姉

妹もいて、お付き合いすることとなりました。結婚する一年前の私の誕生日に聖書をプレゼントされ、「結婚するなら信仰を持った人」という話をされました。

その時聞いた「信仰」や、「集会」というものは、はつきりわかりませんでした。自分には聖書や信仰に関する知識がなく、頭の中で考えをまとめることができなかった上、どのように信仰について調べればよいかわからず、妹に聞いてみたり、インターネットで少し調べる程度で、月日だけが経ってしまいました。

私の家で思い浮かぶ宗教的なことといえば、せいぜいお盆に両親の実家近くの寺や仏壇の前で、お坊さんが経典きんてんを読むくらいで、お正月の初詣はつもとでも、行く年もあるれば行かない年もあったりでしたし、クリスマスも子ども心にケーキを食べたりプレゼントをもらえる世間一般の行事ととらえていました。このように宗教、信仰という言葉を理解しようにも、それができるような

環境に置かれてきていませんでした。

結婚の話をされてから返事をするまで、自分の結婚に対する考えや思いは堂々巡りでまとまらず、信仰に對してもわからないまま、ただ時間が過ぎていきました。しかし、この結婚の話がなければ、二度と結婚しようと思わないのではないかと考え、信仰を持つことと環姉妹と結婚することを決意しました。

結婚の返事を二〇〇四年一月に姉妹にして、初めて岡山キリスト集会の礼拝に行ったことを覚えていますが、聖餐せいさんにあずかったのは覚えていますが、本当の意味が分かるのは後になってからでした。

神戸キリスト集会のキャンプに行つてベックさんに結婚式の日について相談したことは覚えていますが、ベックさんの話はあまり覚えていません。

二〇〇四年四月に姉妹とともに岡山から埼玉へ転勤になりました。また、引越し、職場の環境変化、結婚の準備と慌あわただしく、あつという間に八月の御代田の

西軽井沢国際福音センターで当日になったことを覚えて
います。結婚にあたって二人で選んだみことばです。

また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであ
り、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、
渇く者には、いのちの水の泉から、^{あた}い飲ませる。

(黙示録 21・6)

このみことばは、私が子供のころから好きだった本
の中に出てきた言葉であり、何のことかわからなかつ
たのですが、とても印象深く心に残っていました。私が
イエス様を知らない時から、イエス様は私を捕えてく
ださっていたのだと思い、このみことばを選びました。

その後、一か月後に結婚式と同じ福音センターで姉
妹と二人で洗礼式も行っていたきました。あつとい
う間に過ぎた結婚式、洗礼式でした。集会の皆さんの
主にあるご奉仕を通して、イエス様の愛を思わされま

ありません。キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、
さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまっ
たのです。

もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導
かれて、進もうではありませんか。互いにいどみ合っ
たり、そねみ合ったりして、虚栄に走るのではないよう
にしましょう。

(ガラテヤ 5・16-26)

私たちの結婚式のために奉仕してくださる方々の姿
を見ながら、それまで私がやってきたボランティア活
動にはないものがあると思いました。私には、感謝さ
れたいとか、社会のために何か役に立ちたいという自
分中心の思いが残っていたように感じました。だから、
感謝はされても、物足りなさが残ったり、これでいい
のかという思いがいつもあったのだと思います。しか
し、集会の様々のご奉仕は主がさせてくださったいま
すで感謝です。まさに、主による兄弟姉妹のご奉仕

した。

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれ
ば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は
肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、
そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをする
ことができないのです。しかし、御霊によって導かれる
なら、あなたがたは律法の下にはいません。肉の行ない
は明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、
好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派
心、分裂、分派、ねたみ、^{めい}酩酊、^{ゆうきよう}遊興、そういった類のも
のです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあな
たがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをして
いる者たちが神の国を相続することはありません。しか
し、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠
実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法は

の結果に主のご栄光が現わされることになるからです。
特に思わされたのが、集会の皆さんのご奉仕で支えら
れた私たちの結婚式でした。私自身は、結婚式まで集
会にほとんど集ったことがなく、何もわからない状態
でしたが、本当に多くの方の祈りと奉仕によって準備
が整えられ、当日を迎えられました。これは人間には
できません。結婚式場などに頼めば、もちろんお金に
見合った準備はしてくれ、一時的に満足する形ではで
きると思いますが、結婚式をやったことで終わりです。
私が今まで実家で経験してきた「イベント」と同じで
す。しかし集会の結婚式は、すべてが主のものであり、
私たちの結婚式は主の栄光を現わす機会となりました。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているので
す。それは、この測り知れない力が神のものであって、
私たちから出たものでないことが明らかにされるため
です。

(2コリント 4・7)

結婚後の生活

このようにイエス様と兄弟姉妹方の祈りに支えられてスタートした結婚生活でしたが、私は、主に救われたかどうか確信もあやふやなまま、日曜日ごとに吉祥寺キリスト集会に礼拝に行くだけの生活が続いていたように思います。

二〇〇九年に埼玉から二回目の岡山転勤になり、再び岡山キリスト集会に集うようになりました。集会の中では若い兄弟が少ないため、岡山に来られるメッセージ当番の兄弟の送迎や礼拝場所の予約、「岡山喜びの集い」の司会などのご奉仕をさせていただきました。また、我が家でも家庭集会が持たれるようになり、集会の兄弟姉妹との交わりも増えて、主にある交わりの楽しさを知り、主イエス様のこともよりよく知るようになりました。職場の同僚を何度か家庭集会にお招きできたことも感謝でした。そのうちの一人はキャンブにも何回か参加してくれました。

した場所が与えられ、ほぼ毎週開催されるようになったと思います。本当に感謝です。

また、岡山の老人ホームに入居されていた九十代の男性(吉祥寺キリスト集会の方の叔父上)をたずねて行く機会も与えられました。最初はこの世的な話しかできませんでした。聖書を読み、一緒にお祈りをしてから帰るように導かれました。その数年後、イエス様が働かれ、その方が、「岡山喜びの集い」で洗礼を受けられました。そのことで自分の家族の救いも確信することができました。

二〇一七年に再び埼玉に転勤になりました。埼玉での二年間は吉祥寺キリスト集会の礼拝に参加し、福音集会後の食事の交わりが備えられたり、家庭集会に参加できたり、御代田の「喜びの集い」に行けたりと感謝でした。

実は救われてから吉祥寺キリスト集会に集い始めた最初の五年間は交わりが苦手で、礼拝、福音集会が終

私は、聖書をあまり読むことがありませんでしたが、そんな私にも交わりを通して主は語ってくださり、いつの間にか、主イエス様に救われたことの確信を持つように導かれました。本当に不思議ですが感謝です。こんな私にもメッセージのご奉仕の恵みが与えられました。イエス様から、もつと聖書を読みなさいという命令だと受け止めています。

さらに、鳥取キリスト集会の再開についても祈りに覚えるように導かれ、ずっと祈っていました。その結果、鳥取県倉吉市で集会が起こされ、本当に主は生きておられると主を賛美しました。小さな集会でしたが、毎月岡山から参加させていただき、深い交わりの時が与えられ、たくさん恵みをいただきました。各地から多くの兄弟姉妹が集まり、また新しい人も来られたり、主が祝福されていると思いました。人の力ではできません。当初は倉吉市、鳥取市、米子市の公共施設等を借りて月一回ほど行われていた礼拝が、今では固定

わるとすぐに帰ったり、「喜びの集い」に行っても知り合いが少なかったもので、あまり積極的に参加していませんでした。ところがその後、岡山キリスト集会での八年間で、主にある交わりの楽しさを教えていただいたので、その後の埼玉での二年間は毎回の交わりが楽しかったです。

環姉妹と同じ地域への異動ということもあり、しばらくの間、埼玉の職場にいることになるかと思いましたが、二〇一九年には三回目の岡山転勤となりました。埼玉の二年間の中でも一年ごとに部署移動があったので、あつという間に岡山へ戻ってきた感じです。

岡山へ戻ってきても、以前からあった集会が備えられ、岡山集会の兄弟姉妹、西日本を中心にメッセージされる兄弟やその姉妹と再会できて感謝でした。この群れの中にいられることに感謝です。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なん

というしあわせ、なんという楽しさであろう。

(詩篇 133・1)

自分がなぜ救われたのだろうと思ったときに、結婚というきっかけがありました。人生の中でイエス様は、生まれる前から私をすでに捕えてくださっていたのだと思います。

私が苦しみの中を歩いても、あなたは私を生かしてください。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばし、あなたの右の手が私を救ってください。主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。

(詩篇 138・7、8)

鈴木快典(すずきよしのり)

一九七六年九月生まれ 神奈川県川崎市生まれ

一九九五年 私立桐蔭学園高等学校 普通科卒

二〇〇〇年 職業能力開発総合大学校 工学部 福祉工学科卒

現在 独立行政法人高齢・障害・求職者支援機構 在職中

妻 環(たまき)

父 八郎(はちろう)

母 きよい

妹

すべてを導いてくださる主イエス様

鈴木 環



岡山集会の皆さんと環さん(前列右から3人目)

生い立ちと救い

私は一九七六年に兵庫県で三姉妹の次女として生まれました。私が育った兵庫県加古郡稲美町は田園風景の広がるのどかなところで、しつけには厳しいものの愛情豊かな両親のもと、姉、妹とけんかをしながらも仲良く、のびのびと育てられました。イエス様を知らない時でしたが、幸せな子供時代を過ごさせていただき、主に感謝しています。何不自由なく家族と幸せに暮らしていましたが、一九九九年四月に就職を機に、都会にあこがれて上京することにしました。

上京してからは、初めての一人暮らしと親の保護からの解放、自立生活の自由さがうれしくて、自由気ままに遊び放題の日々でした。そんな自由を謳歌していましたが、二年程過ぎると孤独を感じるようになりました。どんなに楽しい時間を過ごしても家に帰ったら一人。この寂しさを誰かにぶつけるにしても、相手がないことに気づきました。親に寂しいと電話をした

ら心配はしてくれるでしょうが、心配はかけたくないし、親はいつか死ぬので、親に頼ったところで、私の心が慰められるのは一時的なことだと思いました。姉や妹、友人たちも、一時的には慰めになります、が、ずっと一緒にいてくれるはずはありません。各々にはそれぞれの人生があります。この孤独感をいやすにはどうすればいいのか考えました。その結果、私の人生をそのまま受け入れて共に分かち合ってくれる夫を見つけないかと思いました。その時から私の夫探しが始まりました。しかし、私のすべてを理解し愛してくれて、裏切らずに付き合ってくれて、人生すべてに責任を負ってくれる男性はどこにもいませんでした。見た目で好きになった人とお付き合いしたこともありましたが、相手から「会える」と言われればうれしくなり、「やっぱり仕事で会えない」と言われたら悲しくなるなど、コロコロ変わる人の言動に翻弄^{はんろう}される自分が嫌になりました。挙句^{あげく}にはその相手からフラれて、誰

も私を愛してくれない、と孤独感を深めていきました。そのころから、揺れ動かない確固たるものに頼りたいと思うようになりました。信仰者の本を通して、信仰を持つている人は揺れ動かされないというイメージがあり、信仰を持つのもいいかなと思いつながら、何を信仰すればいいのか分からず、近所の教会へ行ってみたりしていました。そんな時に、職場の同期が吉祥寺キリスト集会へ誘ってくれました。初めて参加した麻布家庭集会は非常に人が多く、階段にしか座る場所がないほどでしたが、その階段の壁に貼ってあるみことばに目がとまりました。

わたしの目には、あなたは高価^{たつと}で尊い。わたしはあなたを愛している。
(イザヤ 43・4)

ここに私を愛してくれる方がおられると知り、涙しました。その後、御代田の「喜びの集い」に連れて

行ってもらい、ベックさんに交わっていただきました。ベックさんが信仰と宗教は違うこと、キリスト教も宗教であること、イエス様は全く罪がないのに、私の代わりに罪人として十字架にかかってくくださったことを話してくださいました。宗教に抵抗はありましたが、イエス様は宗教とは無関係なお方であることを知って、イエス様を受け入れる決意をしました。私がイエス様と出会う前から願っていた、私のすべてをわかって愛してくれて、裏切らずに付き合ってくれて、人生すべてに責任を負ってくれる男性はイエス様そのものだったのです。本当に感謝でした。

あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしがらになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。
(イザヤ 46・4)

結婚と主の大きな憐れみ

その後、主の導きにより岡山へ転勤になり、職場で快典兄弟と出会い、二〇〇四年に結婚へと導かれました。快典兄弟は全くイエス様のことを知らない人でしたが、イエス様を受け入れて私と結婚してほしいとお願いすると、悩んだと思いますが、イエス様を受け入れる決意をしてくれました。そのように主が導いてくださって本当に感謝です。結婚が決まってからすぐ、二人とも関東へ転勤することになり、御代田での結婚式の準備も、吉祥寺キリスト集会や春日部キリスト集会の姉妹にいろいろ教えていただき、たくさんのご奉仕により順調にすることができました。本当に感謝でした。

幸せな新婚生活が一年過ぎた頃、主人に病が与えられ、会社に行くことができず、家でずっと寝ている状態が続きしました。夫婦で祈っていても平安がなく、親や友人たち、集会の皆さんが心配して声をかけてくれ

ましたが、慰められることはありませんでした。

ある夜、空を見上げて「せっかく孤独から解放されたくて結婚したのに、頼りになるはずの夫がこんな状況で、いったい私は誰に頼ればいいのか」とつぶやいていました。そして、このどうしようもない不安感と孤独感は身に覚えがあると気づきました。「あれ？これって救われる前の状態では？ 私って救われているんじゃないか？ あれ？ 私にはイエス様がおられるじゃないか！ なぜそれを忘れていたのだ！」と、急に目が覚めて、喜びと平安に満たされました。本当に不思議ですが、結婚してから欠かさず礼拝に集っていたし祈っていたにもかかわらず、いつの間にかイエス様に頼ることを忘れて形式だけの信仰生活に陥^{おと}っていたのでした。だから試練の時に、イエス様に祈っていても、まったく平安がなく、「私は誰に頼ればいいのか？」と愚かにも考えていたのです。どうしようもない者です。

出すことなので、正直な今の気持ちを打ち明けます。一日の終わりに主人と一緒に祈る時、主人の祈りを聞いていると、主人の本心や悲しみや苦しみ、喜びを知ることが出来ます。そしてそのことを一緒に心合わせて主イエス様に祈ることが出来ます。私の心の内側もイエス様に打ち明けることで、主人にも祈ってもらうことができます。一緒に祈ることを通して心が一致する体験ができるのが、何よりも感謝だと思っています。

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。
(マタイ 18・19)

話は変わりますが、私たち夫婦には子供がいません。長らく祈りましたが、主のみこころだからとあきらめ

それでもイエス様は忍耐強くそんな私を待っていてくださったのでした。感謝でしかありません。

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ、わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた。わたしは、わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、「わたしはここだ、わたしはここだ。」と言った。わたしは、反逆の民、自分の思いに従って良くない道を歩む者たちに、一日中、わたしの手を差し伸べた。

(イザヤ 65・1、2)

主にある兄弟と結婚して一番良かったと思うことは、一緒に祈ることができることです。いくら夫婦とは言え、他人ですから、主人が何を考えどんなふうに感じているか分からないものです。会話をしてもうまく理解し合えないこともあります。直接相手に言いづらくこともあります。しかし、祈りはイエス様に心を注ぎ

ていました。しかし、祈りが足りなかったのではないかと、主を信じ切れなかったのではないかと、考えて心乱れることもありました。四十歳を迎えるときに、次のみことばが与えられました。

事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。

(申命記 2・7)

子供が与えられないことに対して自分に何か欠けがあるのではないかと考え、苦しくなることがあります。たが、主の目には何一つ欠けることなく、これこそ主のみこころなのだとはっきりと示してください、本当に感謝でした。それだけでなく、それまでの四十年間を振り返り、いつも主がそばにいてくださり、見守っ

てくださり、必要を満たしてくださったことが、次々に思いだされて、ただただ感謝にあふれました。

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。
(ピリピ 4:19)

仕事のこと

新卒入社した会社は転勤が多く、東京、岡山、東京、山梨、兵庫、岡山、香川、京都、千葉と約二十年間で八回転勤しました。単身赴任をすることなく遠距離通勤をしつつも、仕事を辞めずに続けられたことは主のあわれみではありません。私は、主に与えられた仕事だから自分の意志では辞めないで、みこころで示されたとき、例えば単身赴任を命じられたら辞めるのだ、と心に決めていました。自分の意志で辞めて後悔したくなかったからです。しかし、一度単身赴任を命じら

れた時は、辞めたくなくて、辞める決意をするのはとても苦しく、結果的に会社が転勤先の変更という配慮をしてくれて、仕事を続けることができました。

ところが、二〇一八年三月、仕事がつらく苦しくどうしようもなくて、自分の意志で辞めました。仕事がつらかった時、兄弟姉妹との交わりとみことばだけが私の支えでした。交わりの中で、仕事が嫌だからやめるのではなく、別の理由で辞めたいという自分の勝手な思いを握りしめていることに気づかされました。私は、自分が本当に駄目な者で、私の決意など、なんの価値もないのだ、という事実を受け入れるのに時間がかかり苦しんだのだと思います。でもどうしようもないというところになって、イエス様にゆだねた時に、自分の意思を手放して辞めることを決意でき、心から解放されて感謝でした。仕事を辞めた後は何の後悔もなく、主の導きは最高でした。私はいつも、主にあって正しいことをしたい、みこころに沿った判断をしたい、と

思う者でしたが、主が求めておられることは、私の正しさではなく、主に頼ること、明け渡すことであることを、このことを通して教えられました。自分が正しくはあり得ないことを認めざるを得ません。

半年ほど専業主婦になりましたが物足りず、仕事をすることにしました。二〇一八年九月から社会保険労務士法人で働き始めましたが、主人が岡山に転勤することになり、半年たらずに辞めました。しかし岡山へ転居してすぐの二〇一九年五月には、やりたかったキャリアコンサルタントの仕事に就くことができました。ちよいどいいタイミングで求人があり、まったく経験がないにも関わらず採用していただき、主の配慮としか思えない導きでした。職場環境も恵まれて、いろいろな経験を積むことができ、楽しく働かせていただきました。本当に感謝です。

私は見た。人は、自分の仕事を楽しむよりほかに、何

も良いことがないことを。それが人の受ける分であるからだ。だが、これから後に起こることを人に見せてくれるだろう。
(伝道者 3:22)

キャリアコンサルタントの仕事を通して新たにやりたいことが見つかり、二〇二二年四月に自分の事務所を開業することにしました。開業にあたっては祈りなくしては動けませんでしたが、とてもいい事務所が与えられました。個人事業主になって全部自分で決断する必要があるため、正しい判断ができるようになります。祈ることが重要になってきました。決断の連続で、そのたびごとに落ち着いて祈る余裕がないことが多く、私の願うことがみこころなのかも分らない状態です。それでも、結果が私の思った通りになるうがなるまいが、主はいつもそばにいてくださり、導いてくださっていること、自分はどこまでいっても正しくないこと、だからこそ主に頼るほうがいいことを日々教えられて

います。この間ずっと支えられているみことばです。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。
(詩篇 138・8)

あなたがたは、あわてて出なくてもよい。逃げるようにして去らなくてもよい。主があなたがたの前に進み、イスラエルの神が、あなたがたのしんがりとなられるからだ。
(イザヤ 52・12)

実際、仕事はいつも、天から与えられるマナのように、与えられています。逆に焦って自分で何かをしようと画策すれば、結果的に苦勞するだけです。

しかし、彼らがオメルでそれを計ってみると、多く集めた者も余ることはなく、少なく集めた者も足りないことはなかった。各自は自分の食べる分だけ集めたので

感謝して受け取っていいのだと思わされます。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

(ローマ 8・28)

仕事の成功も失敗もすべて、主がご支配されていることを信じて、今はこの仕事を通して主がご栄光をお受けになるように祈っております。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。

(ピリピ 2・13、14)

主に救っていただき、このように幸せな日々を与え

ある。

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。
(マタイ 6・33)

「自己実現のために頑張っているのではないのか？」と時々サタンがささやきます。自分でもよくわかりません。だからこそ、仕事は主が与えてくださっていることを信じてただ感謝して、与えられた仕事を誠実にやり遂げられるよう祈りながら働いています。そもそも、今の仕事に必要な資格は主から与えられたとしか言いようがないほど奇跡的に取得できたことや、二〇一八年九月から半年だけ働いた経験が今の仕事に非常に役立っていること、二年間キャリアコンサルタントとして働いたおかげで、個人で事業を始められたことを考えると、やはり今の仕事も主の導きであり、

られていることは、ただ主からの一方的な恵みであり、不思議に思うことがあります。すべては、主をほめたたえるためだと気づかされました。

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。それは、神がその愛する方によつて私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
(エペソ 1・5、6)

主イエス様が私にたくさんの恵みを与えてくださるのは、主の栄光を拝し、もつともつと主をほめたたえるためです。

すべてをご存じでありすべてを導いてくださる主にこれからも従い、頼り、感謝し、賛美し続けます。

鈴木環（すずきたまき）

兵庫県立加古川東高校卒、神戸大学法学部卒

独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構二〇一八年退職

社会保険労務士・行政書士事務所経営中

夫 快典（よしのり）

姉 大槻綾（おおつき あや）

妹 清水緑（しみず みどり）



主の導きはいつも益だった

鍋島 聖一



ご家族と聖一さん（一番左）

『主は生きておられる』33号に証しが掲載されてから九年が経過しました。この間にもさまざまな体験を通し主の御名を賛美することができ、また、自分を満足させる事がいかに罪であるかということも知りました。このようなみじめな人間にも働いてくださり、主の栄光を現わしてくださるイエス様に心から賛美をさげたいと思います。

結婚について

私は一九九四年四月九日に、薫姉妹と結婚しましたが、これは偶然ではなく主が導いてくださった結果でした。一九九三年九月に、和歌山での学会出席の為、大阪府に住んでいた集会の知人宅に泊めていただいたことがありました。その時、聖書を読んでいて次の箇所が目に残りました。

さあ、あなたがたは、きよつから後のことをよく考え

よ。すなわち、第九の月の二十四日、主の神殿の礎が据えられた日から後のことをよく考えよ。種はまだ穀物倉にあるだろうか。ぶどうの木、いちじくの木、ざくろの木、オリーブの木は、まだ実を結ばないだろうか。きよつから後、わたしは祝福しよう。

(ハガイ 2:18、19)

このみことばは何を意味するのだろうかと思ひ巡らしていたところ、しばらくして御代田国際福音センターで行われた「喜びの集い」で薫姉妹を紹介され、結婚に導かれました。ハガイ書のみことばを通して、これは主のご計画であることを思いました。

その時はわかりませんでした。後に、この結婚はさらに意味があり、主のご支配のうちに、薫姉妹の家族の救いに向けて導かれているとわかりました。

一九九六年に義父の死を経験しました。それも突然の出来事でした。義父は小料理店を営んでいましたが

みは喜びに変わります。

あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。(ヨハネ 16:20、22)

仕事について

私は二〇二三年二月二十八日をもって三十七年間働いてきた病院を退職しました。勤務していた病院が、三月一日以降は他の事業体に移管されることとなり、今後、どうするか決めなければなりません。ほかの系列病院に行くか、退職するか、移行する事業体の病院に就職するか、祈っていたところ、次のみことばが与えられ、退職する決心をしました。

その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、私が示す地へ

店を閉め、その後会社員となり働いていました。会社の慰安旅行があり、高知の足摺岬で宿泊したのですが、ホテルで急性心筋梗塞を発症し、亡くなりました。そのことを聞いてすぐに、高知に住む私の両親に連絡すると、父は義父が亡くなった病院に行き、車で足摺岬から東京まで遺体を搬送してくれました。父は当時ワンボックスカーを所有していました。両親、職場の同僚、大阪にいる弟が交代で東京まで運転しました。高知で義父が亡くなったこと、私の実家が高知であったこと、父がワンボックスカーを所有していたことなど、すべてが偶然ではありませんでした。主のご計画のうちに進められた出来事でした。遺された薫姉妹の家族の救いは主の約束ですので、その日を待ち望み、祈っています。また、先に天に召された義父に会える日を待ち望んでいます。

：あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲し

行きなさい。

(創世記 12:1)

看護師として三十七年間、様々なスタッフに助けられ過ごしてきたことは感謝でした。手術室に三十四年、病棟で三年間働かせていただき、毎日主に祈りながら、うまくいくことも、そうでないときもすべては主の御心であることを学びながら、そしていかに忠実、誠実に仕えなければならぬかを感じましたし、いかに自分自身を低くしなければ喜ばれないかも知られました。主は私の心のうちを見ておられました。看護師として働き、今日に至るまで主がしてくださったことを少し証したいと思います。

その一

社会人となって何年目か忘れましたが、一度だけ仕事を辞めたくなったことがあります。イエス様の十字架の贖いと罪の赦しを知り、喜びを与えられていた

ことは事実ですが、信仰のない同僚と一緒に業務をすることがむなしくなり、何故、この人達と一緒に仕事をしなければならぬのかという思いが湧いてきて、その思いは次第に強くなり、胸が苦しい状態になりました。別にいじめや、過度な業務を命じられたことはありませんし、働く環境は別に変っていません。ただ、職場で主イエス様を信じ救われているのは私一人でした。ますます胸がつかえる感じでどうしようもなくなり、集会の兄弟姉妹に相談しました。事情を話すと、試練、苦しいことは神に愛されている証拠、試練は鎖につながれている犬と同じで、鎖のある長さまでは来ることが出来るが、それ以上は届かないことなど教えられ、平安になり、その時を境に今までの思いから解放されました。それと同時に自分がいかに高慢な思いで仕事をし、同僚に接していたかを思わされました。自分中心の思いで苦しみ、悩み、結局、器の小さい人間であることを知らされました。主はヨブにされたように、

試練に対して必ず私たちの耐えられるところまでを知って支配しておられるとともに、御心を示してください。

その二

病院には様々な人が入院しますが、集会の兄弟姉妹も私が勤務していた病院に入院されました。はじめの間、私はその方々をお見舞いに行くことを、躊躇していました。何を話せばいいかを考えて悩んでいましたが、それは自分の思い過ぎでした。主は交わりの時を通して私の心を解放してください、喜びに満たしてください、平安な思いで退室することができました。それは一度や二度ではありませんでした。そのことを体験してからは、業務が終わってお見舞いに行くことが楽しみになってきました。また入院された集会の方も主の導きで来られたのであり、主が祝福しようと計画されていること、私の信仰の訓練のためでもあるこ

とを知ることができました。その方の入院を通して主が何をされるのか楽しみにしていました。そして不思議なことに、お見舞いのため病室にいる時間を主が守ってください、会話や祈りの間も妨げるものがなく、すべてが神の支配の下にあったことを改めて主に感謝しています。

あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

(マタイ 6:3、4)

「あなたの罪は赦された」と言うのと、「起きて歩け。」と言うのと、どちらがやさしいか。

(マタイ 9:5)

その三

私は二〇二三年二月二十八日で働いていた病院を退職しました。私は病院で特に自分がキリスト者であることは言っていませんでしたが、退職する際にイエス様を紹介するために、『実を結ぶ命』、『主は生きておられる』などの集会の冊子を渡すことができました。同じ時期に退職した同僚や他部署で働く事務の方、設備管理の方、清掃業者や医材調達部門の方々、また日頃業務上関係している方々に感謝の思いを込めて渡すことができました。渡すまで心配をしていましたが、主が守りのうちに導いてくださいました。その方々の救いの恵みを待ち望んで祈りたいと思います。

最近起こされたこと(一)

二〇二二年十月十八日、長男が結婚しました。小さい頃は集会の日曜学校に集っていましたが、中学から部活動を始め集会から離れていきました。そのことは

私たち親の責任でもあると思っています。住宅メーカーに就職し、長年お付き合いしていた女性との結婚が決まりました。結婚式では最後の挨拶に父親として何を話すか考えていましたが、イエス様を紹介しようと思い、聖書から結婚の意義について話し、詩篇三十七篇から何か所かみことばを読みました。一般的な挨拶のことばは殆ど述べませんでした。ところが、

挨拶が終わってすぐ薫姉妹が意識を失って倒れてしまいました。別室で横になり意識はすぐ回復しましたが、極度の緊張状態からのようでした。自宅に戻り「最後の挨拶が長過ぎた、みことばも二、三か所で良かったんじゃないのか」と言われましたが、私の方はイエス様を知らない方々に、少し証してきたと思いましたが、心のうちに不安はありませんでした。その後、薫姉妹は精密検査をしましたが無常はありませんでした。このことを通して主は私たちに何をされようとしているかはわかりません。しかし、すべてを益に

変えてくださることを確信していますので、長男たちが将来導かれることを待ち望んでいます。お嫁さんの家族も、主の救いの計画の中にあることを信じていますので、薫姉妹とともに祈りをしています。

ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさになさる。

主は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。彼らはわざわいのときにも恥を見ず、きぎんのときにも満ち足りよう。（詩篇 37・16、18～19）

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒れはしない。主がその手をささえておられるからだ。私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。

（詩篇 37・23～25）

最近起こされたこと(二)

二〇二二年十一月二十二日、私はコロナに感染しました。しかしこのことも主の御手のうちでした。なぜなら義母が腰椎圧迫骨折になり薫姉妹は十一月十六日から実家に看病するため帰っていたために、濃厚接触者に該当しませんでした。幸いにも私のコロナの症状は軽く、療養期間を穏やかに過ごすことができました。

義母の骨折を通して主が導いていることを確信しています。コルセットによる保存療法で様子を見ながら、通院しています。同時に介護保険の申請をしました。また薫姉妹の実家のリフォームの話が出てきました。当初は二〇二三年一月に工事開始の計画でしたが、主の御心はそうではありませんでした。工事期間の数か月、引越が必要となり、短期で貸し出す物件がなかなか見つからず、折り続けたところ、今年夏に取り壊す物件があり、短期なら大丈夫という条件で契約できました。三月からの入居ができそうで、しかも実

家から歩ける距離に、主は与えてくださいました。これなら義母の病院の通院にも不自由がなく住めるようです。すべては主が備えてくださった結果だと思っています。私たちの知らないところでご支配くださり、あわれみをもって恵んでくださった主を賛美したい思います。今は義母が主に導かれること、また実家に同居している義弟の救いを待つだけです。義父が亡くなって以来、主の導きと家族の救いを待ち望んで来ましたが、現在はその途中経過にあると言えます。この先どうなるかわかりませんが、ただ信頼して歩むだけです。

最後に

現在私たちは夫婦二人住まいです。長男は神奈川、次男は浜松にいます。次男もまだイエス様の救いにあずかっています。そのことも祈りの課題です。しかし私の実家の家族が救われたように、主の約束です。で、確信をもって待ち望んでいます。また、私の就職先

のことも主が導いてくださいますので、御心の通りになることを願っています。朝と晩に薫姉妹とみことばを読み、祈っていますが、主が聞いてくださっている導かれることを確信できます。またこれからこの罪人の私を忍耐してくださり、様々な出来事を通して主ご自身を現わしてくださると期待しています。

私はいい夫ではありません。いい父親でもありませんし、理想の人間でもありません。しかしイエス様が私の罪を赦してくださったから希望を持てます。人の目をすぐに考えてしまう者ですが、そこから主に心に向けるようにしてくださいますので、心からイエス様に感謝すると同時に、イエス様以外に自分の人生で頼るものは何もないことをあらためて思います。また自分が高ぶることがないようにと祈るだけです。

見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。(ハバクク 2・4)

私がこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためなのです。(ヨハネ 15・11)

鍋島聖一(なべしま せいいち)

一九六四年高知県生まれ

三和小、香長中、高知小津高、聖隷短大浜松衛生短大、東海大学大磯病院就職、二〇二三年二月退職

妻 薫(かおる)

長男 将希(まさき)、妻 結衣(ゆい)

次男 喜満(よしみつ)

キリスト者の戦い

重田 定義

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天に在るものもろの悪霊に対するものです。(エペソ 6・12)

このパウロのエペソ人への手紙の箇所から「キリスト者の戦い」、あるいは「信仰の戦い」について一緒に考えてみたいと思います。

イエス様を信じる以前の私たち

エペソ人への手紙2章1節から3節において、パウ

ロは、イエス様を信じる以前の私たちもそうであったように、この世に住む人々は、それとは知らずにサタン(悪魔)に支配されて、神様に顔を向けようとしないうちに、自分の思いのままに生きている、それが主を信じないすべての人間の生き方であるというふうに書いています。

あなたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子ら(神様に従わない子ら)の中に働いている霊(悪霊、悪魔)に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつ

ては不従順の子らの中にあつて、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

(エペソ 2:1-3)

とあります。サタンは、かつてはこのように自分の支配下にあつた私たち人間が、イエス様を信じてからは、イエス様に属する者とされていることを非常に怒り、私たち信者を憎んでおります。なぜならば、自分(サタン)をさばくために来られたイエス様をサタンは憎んでいるからです。ですから、私たち信者を、イエス様から何とか引き離して、再び自分の支配下に置こうと思つて、あの手この手を使い、私たちの隙をねらつて日々攻撃をしかけてきます。

イエス様は弟子たちに次のようにおっしゃいました。

もし世(世とは、この世の支配者であるサタンとその支配下にあるこの世の人々を指す)があなたがたを憎

になったのであります。

この世に生きるキリスト者の問題

けれども、この世に生きている私たちキリスト者は霊だけで生きていくわけにはまいりません。パウロがローマ人への手紙に次のように書いています。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善(神様を第一として生きる、生きて従うということ)が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえつて、したくない悪(自分を第一にして自分の欲に従うこと)を行なっています。(ローマ 7:18、19)

と嘆いております。

そのように、この世に生きている間は、なお私たち

キリスト者の戦い

むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであつたなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえつてわたしが生かからあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。(ヨハネ 15:18、19)

これはもちろん弟子たちのみならず、イエス様を信じる私たちに対するみことばでもあります。

私たちキリスト者の「霊」は、イエス様を信じる以前は、罪に汚れて死んだようになっていたために、正しく働くことができませんでした。けれども、イエス様を信じた瞬間に、イエス様が十字架の上で流された聖い血潮によつて罪が贖われ、そして新しく生まれ変わったことによつて正しく働くようになりました。その結果、私たちを愛していのちを捨ててくださったイエス様に、心から従いたい、お仕えしたい、と願うよう

は肉(罪に支配されている自分)の思いに振り回されることが多く、その弱点をサタンは突いてくるのであります。

以上のことから、この世に生きるキリスト者の敵といふのは、この世と、そしてこの世を支配するサタンであり、また、私たち自身の肉の思い、肉の欲望であると言ふことができると思います。そして私たちは、キリスト者をイエス様から離れさせ、墮落させ、再び自分の奴隷にしようと攻撃してくるこれらの敵と戦うのであります。

私たちキリスト者にとつて最大の敵であるこのサタンについて、ペテロは初代教会の信者に宛てた手紙の中で、サタンは襲いかかる隙をねらつて私たちの周りを歩き回っているから、私たちは襲われないために、いつも目を覚まし、ガードを固めていなさいと励ましています。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵で

ある悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。

(1ペテロ 5:8、9)

悪魔は、誰もが悪魔と気づくような姿、形や方法で私たちキリスト者に近づいて来るわけではありません。光の天使を装ったり、聖書のみことばを逆用するなど、様々な策略を用いて攻撃してくる恐ろしい敵なのです。ですから、私たちキリスト者は、片時も油断することはできません。

またヨハネは、キリスト者の敵であるこの世と、自分の肉について次のように警告しています。

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわ

ち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

(1ヨハネ 2:15、16)

先ほども申しましたように、「この世」は悪魔の支配下にあり、悪魔は肉の欲望を満たすことを第一に考えて生きている人を、権力や富や名誉という肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などの餌で誘惑するばかりか、人々が互いに争ったり、憎み合ったりして、苦しみ悲しむことを自分の喜びとしています。

また私たちキリスト者も、この世に生きている間はまだ肉の衣を着ているがために、悪魔はキリスト者のその弱い「肉」の部分をついて、より激しく攻撃をして来るのであります。使徒ヤコブが、国外に散っていたユダヤ人キリスト者に向けた手紙には次のように書かれています。

何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるので

しょう。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです。

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

(ヤコブ 4:1-4)

このようにヤコブは、キリスト者が自分たちの敵である悪魔と戦うのではなく、逆に、悪魔の策略に惑わされてキリスト者同士が互いに憎み合い、争い合うという悲劇が起こるということを戒めているのです。

私たちキリスト者は未信者から、「キリスト者同士が争うのはどういうわけですか」「キリスト者の国同

キリスト者の戦い

士が戦いをするのはどういうわけですか」「なぜ、愛と平和を信条にしているキリスト者が互いに殺し合い、争い合うのですか」という質問をよく受けます。このような争いこそ、キリスト者の心の中にある肉の欲に働く悪魔の惑わしによるものであり、この世の人々に、キリスト者同士が争い合い、憎み合う姿を見せつけることによって人々をつまずかせ、人々を神様から引き離そうとする悪魔の策略なのです。

重要な戦い

まだ救われていない私たちの家族もまた、悪魔の支配下にあって、この世の目に見えるものだけを求めて生きている人々に属しています。ですから、悪魔はキリスト者の家族がイエス様を信じないように、私たちが家族に福音を伝えることを必死になって妨害します。これも、私たちキリスト者に課せられた大変大きな、そして重要な戦いではないでしょうか。

イエス様はこのことについて次のようにおっしゃっておられます。

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っ
てはなりません。わたしは、平和をもたらすために来
たのではなく、剣^{こぶち}をもたらしために来たのです。なぜ
なら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をその
しゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、
家族の者がその人の敵となります。

(マタイ 10:34-36)

大変厳しいみことばです。ここで「平和」とおっ
しゃっているのは、神様からもたらされる「平和」では
なくて、この世の一時的な表面的な「平和」であります。
私たちキリスト者は心情的には、自分の愛する家族
が敵だとは決して思いたくありません。ですから、イ
エス様の福音を伝えること、イエス様を証しすること
によって、家族のこの世的な平和が乱されること、家

族関係が壊されることを恐れます。そして、つい、この
世に属している者である家族と妥協してしまうことも
少なくないのではないのでしょうか。

この世に属している家族と妥協すると一口で言っ
ても、いろいろな場合があると思います。たとえば、福音
を伝えようとしても耳を貸さない夫や子供の態度に出
会ったと、諦^{あきら}めてしまつて、イエス様に家族の救いを真剣
に祈らなくなってしまうこともあるでしょう。あるい
は、日々の生活の中で、主からの知恵をいただいて、御
霊に導かれて、家族に福音を伝えるという努力を怠っ
てしまうということもあるのではないのでしょうか。

また具体的には、親族の葬儀の時に親族に妥協して
焼香^{しょうこう}してしまつたり、あるいは家族に同調して仏壇
や神棚を拜んでしまつたり、あるいは未信者との結婚
を承諾してしまう、そういう風な具体的な様々な問題、
主のみこころに反する問題がいろいろあると思います。
けれども、はつきりと主の側に立つことをせずに、
家族とのこの世的な平和を壊さないようにと、福音を

伝える大切なこの戦いを恐れて家族と妥協を続けてい
る限り、家族は救われません。

聖書に「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも
あなたの家族も救われます。」(使徒16:31)という有名
なみことばがあります。けれども、うっかりしますと、
このみことばを私たちは思い違いして受け取ってしま
うことがあるのではないのでしょうか。「自分が信じて
いるのだから、自然に家族も救われる。戦わないでた
だ待っていればいいんだ」と。もしそういう風に思っ
ておられるキリスト者があれば、それは思い違いであ
ります。このみことばの真意はそうではないのではな
いでしょうか。

このみことばは、家族が救われるためには、まず、自
分がイエス様を心から信頼すること、イエス様のお約
束を心から信頼すること、ここから始まると言ってい
るのであります。そして、家族の救いを信じて真剣に
祈り続ける、その真剣な祈りを、主がみこころにかな

うものとして聞き入れてくださるから家族が救われる
のです。
自分が信じれば、自然に何もしなくても自動的に家
族が救われるということではないと思います。もし、
愛する家族が救われなければいっただいどうなるので
しょうか。主の救いの御手を拒み続ければ、永遠の滅
びに行くしかないのであります。

ですから、愛する家族が救われるために、たとえ信
仰のゆえに家族との間に一時的に戦いが起こつても、
妥協することなく、イエス様の側にしっかりと立つて
御霊により頼んで家族と向き合うことが必要であるこ
うなこと、またそれが家族に対する本当の愛であるこ
とを、イエス様は「家族の間に剣を投げ込むために来
た」というおことばでおっしゃっているのであります。
不信者との妥協^{いとも}を戒めて、パウロはコリントの信者
宛ての手紙の中で次のように書いています。

不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけ

ません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアル（すなわち悪魔）とに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。

「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。」

（2コリント 6・14～17）

このみことばの中で主がキリスト者に、「彼ら（不信者）の中から出て行き、彼らと分離せよ」——不信者というのは未信者、不信仰な者と言っているいかも知れません——とおっしゃっているのは、言うまでもなく、救われていない家族と一緒に住んではいけないという意味ではありません。未信者の家族と、霊的に妥協してはいけないとおっしゃっているのであります。

先程も申しましたが、救われていない家族はサタン、悪魔の支配下にあります。自分ではそれと気がつかないで悪魔にそのかさされ、あやつられて、キリスト者に反抗したり、敵対したりするまことに気の毒な人たちなのであります。

だからこそ、神様は私たちの救われていない家族をあわれんでくださって、先に恵みによって救われた私たちを用いて救おうとしておられるのであります。

そういう意味で、救われていない家族が私たちキリスト者の敵なのではなくて、本当の敵は、冒頭に引用したみことばにありますように、「この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいますもろもの悪霊」であることを、私たちキリスト者はしっかりとわきまえていることが大切なのであります。

愛するが故にこそ、私たちキリスト者は救われていない家族に対して安易に妥協せず、その背後にいる悪魔に対して毅然（きぜん）とした態度をとるのであります。このことを私たちは常にしっかりと覚えて家族の救いを

確信しつつ、日々真剣に主に祈ることを主は望んでおられるのではないのでしょうか。

私たちの心構え

では、私たちはどんな方法で、敵であるこの世の支配者サタンや自分の肉と戦ったらいのでありましようか。パウロはこれについてエペソ人への手紙の中で具体的に次のように書いています。

悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。

（エペソ 6・11）

では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾（おおたて）を取りなさい。それによって、悪い者（悪魔）が放つ火矢

を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。

（エペソ 6・14～17）

これこそが、私たちキリスト者に与えられている武具であり、私たちはこの武具を身に着けて戦うのであります。これらの武具はいずれもこの世の武具とは全く異なりますけれども、パウロが、「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」（2コリント 10・4）と言っているように、これらの神様から与えられた武具こそ信仰の戦いにおいて必要不可欠な力のある武具、武器であります。

けれども、この武具を身に着ける前に、私たちが敵と戦うためになすべき大切なことがあります。それは私たち自身の心構えであります。その心構えとはいったい何でありましようか。一つは、私たちがイエス様

キリスト者の戦い

とともに信仰の戦いを戦う兵士であるという心構えがあります。

パウロは愛する同労者のテモテに宛てた手紙の中で次のように書いています。

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをもにしてください。兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者(すなわちイエス様を喜ばせるためです。

(2テモテ 2:3、4)

私たちは果たして、イエス様の兵士としての心構えができているでありましょうか。もし私たちがイエス様の兵士ならば、戦いの最中にこの世に心を向けている暇などある筈がありません。そんなことをしていれば、戦いに負けてしまいます。従って私たちはイエス様の兵士として信仰の戦いに臨むからには、日常生活のことなど決して思い煩うまいという堅い心構えが必

や私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2:20)

私たちはまず自分の古い人、古い自分というのは、もうすでにイエス様とともに十字架に架けられて死んだ、というこの事実をしっかりと自覚することであり

ます。そして、次に、今の自分はどうか、今の自分は、自分の中に住んでくさっているイエス様の御霊によって生きているのだ、自分ではなく、イエス様の御霊によって生かされているのだ、という確信と決意をしっかりと持つこと、これが必要です。これは自分を主に明け渡すということでもあります。この決意をもつて、どうか私の欲望を抑えられますようにと心から切に祈れば、必ず、私たちの中に住まわれる主の御霊ご

キリスト者の戦い

要なのです。コリント人への手紙の中で次のようにパウロは言っています。

私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。

(1コリント 9:27)

これが、私たちの日常生活で決して思い煩わないための心構えではないでしょうか。私たちが意識して自分の肉の思い、欲望を抑えるという心構え、これは、自分のからだを打ちたたいて従わせるほどの覚悟が必要で、しかしながら、これも悲しいことに、私たちは自分の意志では出来ないということを痛いほど経験しております。いったいどうしたら自分の欲望を抑えることができるのでしょうか。それには秘訣があります。パウロはガラテヤ人への手紙にこう書いています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もは

自身が働いてくさって、御霊によって自分では成し得ないことが可能となるのであります。

すでに勝利されている主

これまで、私たちキリスト者がなぜ戦わなければならないのか、そして、また、誰と戦うのかということにつきまして、一緒に考えてまいりました。そして私たちの敵は、悪魔と、悪魔に支配されているこの世の人、および、自分の肉の欲望など、大変手ごわい相手であることを知りました。しかしながら、いかに手ごわい敵であっても私たちは勝利を確信することができます。それはイエス様ご自身が次のように私たちを励ましてくださるからです。

あなたがたは、世にあつては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。

(ヨハネ 16:33)

また、ヨハネも言っています。

私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。
(1ヨハネ 5:4、5)

このように、私たちが堅くイエス様の側に立って、常にとともにいてくださる勝利の主イエス様を心から信頼し、その主により頼む時に、どんな手ごわい敵に対しても勝利することができるようです。

イエス様がおっしゃっているように、またヨハネが言っているように、すでに私たちは世に勝っています。このイエス様のみことばを信じて従う時に、私たちの勝利は決まっているのであります。

主のご再臨が間近に迫っている今の時にあって、私たちキリスト者もパウロと同じように、イエス様の兵士として与えられた神の武具をしっかりと身に付けて、恐れることなく、たじろぐことなく、信仰の戦いを

勇敢に戦い抜いて、やがて天の御国でイエス様にお会いした時に「あなたがたはよく戦った」と誉めていただくことができたらどんなにか幸せなことではないでしょうか。

重田 定義 (町田キリスト集会)

(二〇一三年七月二〇日「御代田喜びの集い」におけるメッセージ)



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】 0422-21-8450 (集会所)
東京都 武蔵野市 吉祥寺 本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】 ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によりこびをもつてなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものではありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

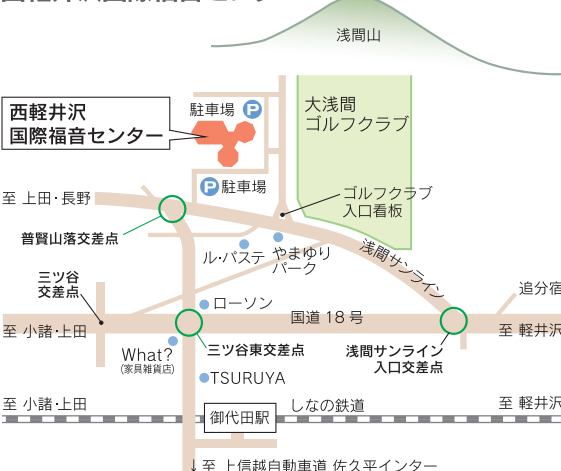
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
【電話】 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
【電話】 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分 (1000 円程度)
徒歩 約45分 = 3 Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分 (約7km)
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒とすることができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと - ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ - 私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そここのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の实在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもかも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物



主は生きておられる 第62号

定価100円（税込み）2023年9月15日発行

編集スタッフ	岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力
	芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守格太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ <http://christ-shukai.net/>

出版本を購入されたい方、お問い合わせ webmaster@christ-shukai.net

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。